
三国記

上沼義一

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三国記

【Nコード】

N32350

【作者名】

上沼義一

【あらすじ】

黒髪と黒の瞳。魔王の証とされるそれを持つ人間であるアインは、生まれたばかりである魔王名由佳と出会う。人間と魔族の対立の図式の中に、人と魔族が共存する新国家が名乗りをあげる。屈強な魔族に対抗するために男を死ぬための兵、女を母体のみと捕らえた人間達。王を失い、補充の無い兵数でありながら、万進する前魔王に産み落とされた魔族。出来たばかりの小国である人と魔が共存する国。生まれながらに戦うことを義務づけられた世界の中で、彼らは共存を求める。

1部 黒髪二人 1話誕生（前書き）

魔王庵考死すの報は、その日の内に人の世に駆け巡った。

人と魔との戦争が始まってから十世紀。初めて魔の王が寿命ではなく人の手により屠られた。魔族は屈強であり、人の力に十倍した。人は魔を恐れ、太古の王アンバスが人の世に残した魔族の力を弱める聖域の中で、攻め寄せる魔族の影に怯えながら毎日を暮らしていた。

魔王庵考の軍はかつてなく屈強であり、魔の力を極端に弱める退魔聖域の中にあつて、人間の軍を圧倒した。現在の人類の唯一の国家であるミルスタインの王都まで迫り、人々は絶滅さえも覚悟した。その庵考が人王カズラによって屠られたのだ。人々はその事実に喝采した。そして次代の魔王の姿を捜し求めた。魔の王が死ねば、世界のどこかに新たな魔の王がどこからともなく生まれてくる。魔王、魔族が次代の魔王を産み落とすに非ず、魔王とは世界に生み出されし存在である。即ち魔族とは滅びることあり得ず、その事実到人々は千年の時に戦い、疲れることに慣れてしまっていた。

しかし庵考をカズラが屠ったという事実が、人々を勇気付けていた。

『新たな魔王を見つけ、殺さず活かさず監禁すれば、我らが待ち望んだ平和が手に入る。魔王を捜し、捕まえるべし』

庵考死すの報と共に各地にもたらされたその触れは、人々の心を掴んだ。

当然誰も見たことの無い次代の魔王の顔など誰も知らない。しかしその特徴は誰でも知っていた。黒い髪に黒い瞳。人は勿論、魔族ですら持つ者のいないその絶対的な特徴を、人々は求めれば良かったのだ。

1部 黒髪二人 1話誕生

何故生れ落ちたのか。それは人の子であれば幼さゆえに考えることとあたわず、魔族であれば言うまでもない問いである。魔王は世界が生み出すが、魔族は王によって産み落とされる。魔族というものは生まれながらに人間という成人の姿であり、それ以降成長することとは無い。言語も扱え、最低限の知識も有している。彼らは生れ落ちた瞬間より彼らが親、王への忠誠に支配されている。彼らが生まれた意味は王のためであり、彼らが生きる意味もまた王のためである。

では、魔の王はどのようなであろうか。世界に生み出されし魔の王は、生まれながらに考える力を有しながら、しかし何故自分が生み落とされたのかを理解できなかった。

世界に与えられた知識が、自らにたなびく黒髪をもって、自分が魔王であるのだと告げていた。

生まれながらに知識と歴史を持つ感覚というのは、人間には理解出来まい。

しかし彼女は庵考が人に屠られ、それが故に自らが生れ落ちたことを理解していた。

名由佳。頭の中に浮かんだその文字と音が、世界が自らに与えた名なのだと知る。魔族の王に相応しい、六枚の翼が彼女の背にはあった。しかし歴代の魔王と違い、竜や蝙蝠の持つような翼でなく白い羽毛が集まって出来た、翼というよりも羽のように見えるのが少しばかり名由佳には不思議だった。

生まれた場所はどこかの山の中のようなだった。意識がはつきりとした時、名由佳は木々に囲まれた中にぽっかりと空いた場所の、岩の上に倒れていた。山であると思っただのは、大地が傾いていたからだ。木々が遮ることの空間に、真昼の太陽が照りつける。魔王が生まれたその時、日が真上にあるというのも滑稽なことだと彼女は思

った。人は魔を総じて闇とし、夜と結びつけるものであることを彼女は知っていた。

白い絹で出来た二の腕と足元まであるローブを身に着けている。生まれながらに着衣している点には、違和感を覚えなかった。喉の渴きを覚え、彼女は歩き出す。翼で飛ぼうかとも考えたが、乱れ立つ木々が邪魔になりそうなので止めた。

知っている、出来るのに初めて歩く。それもまた不思議な感覚だった。これから起こり、体験していく多くのことも、自分は知っているにもかかわらず初めて経験していくのだろうと想像すると、少しだけこれからの生が楽しく思えた。

そそり立つ木々。足元に生える草。所々顔を見せている花。時折顔を見せる小さな虫。どれもが初対面である。

木々の合間を縫って歩いていくと、水のせせらぎが聞こえてくる。彼女は歩くことが楽しくて、喉の渴きも忘れていた。当初の目的を思い出し、音のする方へ歩いていく。

音が大きくなるにつれ、視界に飛び込む光が増えていく。木の量が減っている。足に伝わる感触も、土の柔らかい感触から、だんだんと石ころや砂利の伝える硬いものへと変わっていた。

急に視界が開ける。小川というには少しばかり大きいかもしれない魔族であれば簡単だが、普通の人間ではぎりぎり飛び越えられないだろう川が流れていた。石の上を器用に歩き、名由佳は水へと近づいていく。水際にしゃがみこみ、右手をつける。冷たいと思うのも初めてのことだが、それは心地よいものなのだと思に刻み込まれる。そのまま両の手ですくって口元に水を運ぶと、乾いた口の中が潤っていく。それがいかに感動的で、充足的であつたかを表す言葉は、彼女はまだ知らなかった。

澄んだ水面に映る自らの姿を見る。

肌は酷く白く、作られた白である衣に負けないほどだった。それが漆黒の髪と対照的である。頭の黒髪の間から、白い角が一本生えていた。彼女の掌ほどの、そう大きくは無い角だった。それに対して

髪は酷く長かった。背にある羽と触れ合って、少しばかりむず痒い。後で切ったほうが良いかもしれない、と名由佳は思う。

「ん」

それが、彼女が生まれて初めて発した声だった。一人の男がいた。茶の髪に白髪が混じり始めた初老の男が、名由佳のことを見ていた。名由佳、というよりも魔王である彼女からすれば、人間の気配に本来気づかないはずなどない。魔族は他者の気配に酷く敏感であるのだ。その王である名由佳がその男の気配に気づかなかったのは、よほど彼女の心が世界との対面に躍っていた証拠であるだろう。男の視線は名由佳の髪を追った後、背の翼、瞳へと移された。名由佳もまた、初めての人間を観察した。

男の手に釣り道具があるわけでもなく、背に薪を背負っているわけでもない。一体何の用でこんな場所にいるのか、名由佳には分からなかった。男と目が合った。初老の男は背を向けて駆け出す。声はあけていなかったが、名由佳は男が自分を恐れたのだろうと理解した。名由佳の中に、歴代の魔王に自然と生まれ出でる感情が沸きあがる。千年の時を魔と争い続けた人間を、憎いと思う心である。

背を見せて駆け出すその男を殺すのは、名由佳にとっては容易なことだった。彼女にとって人間などは脅威の対象でなく、手をかざすだけで切り裂くことが可能であり、魔術と呼ばれる魔族の象徴を相手に向かって行使するだけで、相手を屠ることが出来る。

左手に小さな火の玉が生まれ、照準を男の背に向けたところで、名由佳は手を止めた。自然、火球は彼女の手の中から消えている。男の姿が、木々の中へ消えた。彼女が火の玉を放てば、木々が燃える。生まれたばかりの自分を包んでくれたこの山に、そのような所為をするのにためらいが走った。追いかけて手で引き裂くのも簡単だが、それも億劫だった。小さく一つ息をついた名由佳は、すぐに別の視線を感じ取った。見られていることを自覚する。突如自分のやってきた方とは逆の木々の合間に、人の気配が現れた。そう遠くはない。その距離から考えて、今まで相手に観察されていたようだ。それに

気づかなかった自分にはよほど緊張感が足りないのだと名由佳は思ったが、同時に先ほどの男とはまるで違う、野生の動物かと勘違いさせるほど静かな気配を不思議に思った。それにこの距離に入るまで気づかなかったのに、いきなりその場に気配が現れたということは、相手は突如気配を消すのを止めたことになる。

「へえ……。あんたまさか魔王様かい」

名由佳が視線に気づいたことに、相手もすぐに気づいたようだ。木々の合間から聞こえてきたのは少し高めな少年の声だった。

2話 出会い

彼は気配を露にただけではなく、名由佳に声まで掛けてきたのだ。ついで、草を踏むがさりという音と共に、少年は日の当たる小川のほとりへ姿を現した。

「え？」

驚きという感情を得たのも、名由佳にとっては初めてのことである。勿論、陽の光を受けた時。水の冷たさに触れた時。感動とともに驚きは存在したが、そういうことではない。

太陽の光は暖かく、水は冷たいものであると、彼女は生まれながらに知識として持っていた。しかし目の前の男の存在は、彼女が世界から与えられた辞書の中には存在しない。

「本当に俺と同じ髪をしてるんだな。瞳の色も濃い」

少年は魔王以外に持つことがないはずの黒い髪と瞳を携えていた。髪は男性にしては多少長めで耳が隠れ、後ろ髪は肩に触れる程度に伸びている。彼もまた名由佳の存在に驚いているようで、あまり大きいとは言えない切れ長の目が見開かれていた。

「俺と違って角も翼もあるし、やっぱり世間で噂の魔王様か」

少年は手に竹で出来た籠を携えていた。魚を入れるためのものだが、それは名由佳には分からない。粗末な麻肘上、膝下までの衣服を纏っている。茶の布下から覗く肌色は薄く、名由佳ほどではないにしろ髪とは対照的に白かった。

「人間、なのですか？」

名由佳がそう思わず尋ねたのも無理はない。歴史上に存在し得ないはずの魔王以外の黒髪である。むしろ自分が本当は魔王ではないのではないのかとさえ錯覚しそうになる。

「さあ……。俺には学ある方々が定めた人間というものの定義なんて分からねーけど、人間の腹の中から出てきたのは間違いないらしい」

彼は警戒を解いてはいなかった。小川を挟んで名由佳と対峙したまま、それ以上近づこうとはしない。名由佳も同様である。目の前の少年の強さを計りかねた。青年と呼ぶには幼く、少年がしつくり来るには年を取りすぎているように見える彼を、先ほど血肉へ変えた男達と違い、確実に屠れるという確信が沸かなかった。数少ない魔王の持つ本能が、名由佳に彼の危険性を訴えていた。

「どうして姿を現したのですか？」

「そっちが俺の気配に気づいたからだ。ばれちゃってるなら隠れる意味はないだろ」

名由佳の問いに、少年は簡潔に答えた。

「どうして気配を現したのですか。私は最初気づいてはいなかった」何が目的で、彼が気配を消し、名由佳を窺っていたのかは分からない。しかし今目の前で少年が警戒を解いていない以上、隠れていられるならばその方が都合が良かったのではないのかと、名由佳は疑問に思う。

「窺っていたというか、ここに人の気配があつたから様子を窺っただけさ。見ての通りの髪をしているんでね。あまり他の人間と顔を合わせたくないんだ」

少年は自嘲の笑みを浮かべる。女性的なその表情は、人によつては見惚れる程度に美しかったが、名由佳にはあまり人間の顔に対する美醜の意識は無い。

「普段はこんな山奥に人なんて物好きくらいしか来ないんだけどね。今は新しい魔王様を探そうって人間が大勢ちよこちよやってくる。それこそ見つかったら面倒だ」

彼の言っていることは一応筋が通っていた。名由佳にも黒髪の人間が存在すれば、どういう境遇に置かれるかの想像はついた。彼と逆の位置からものを見れば、黒髪と黒い瞳のものが生まれるのが当然である種族に、ある日赤髪と赤眼の赤子が生まれればどうなるか。神の子と呼ばれるか、悪魔の子と呼ばれるか。目の前の少年の境遇が、後者であるだろうことは、話し振りで想像がつく。

名由佳は少しばかり緊張を解いた。いつでも動けるように込めていた足の力を緩める。

「それで私が本物の魔王だと考え、人間ではないから安心して気配を露にしたのですか？」

しかしそれはそれで矛盾しているように名由佳は思う。魔王とは、元来人間の仇敵であるのだから。

「それは違う」

初めて少年の語調が強まった。心外だと言わんばかりである。

「流石に魔王様相手に警戒解くほど馬鹿でも命知らずでもないさ。気配が出たのは単純に驚いちゃったからで、意図的にじゃない」

言葉の通り、少年は戦闘体制こそ取っていないものの、充分に名由佳を警戒していた。

「なるほど」

名由佳は少年の言い分に納得した。先ほど自分が同じ黒髪を見て驚いたばかりである。いきなり目の前に魔王と思しき存在がいれば、それは驚いて然るべきかもしれない。世界より与えられた人間は魔族の敵であるという知識が名由佳の中で薄らぎ、彼への興味が沸き始めた。

「あなたはこの山に住んでいるのですか？」

「ああ。一応ミルスタインの国土だけど、退魔聖域外のここいらは人が少ない。俺みたいな異端者には多少なり住みやすいみたいだ」

生まれた時からその髪の色で苦労してきたのだろう。年齢と不釣り合いな自嘲の笑みが消えることは無かった。

「なるほど。ここは退魔聖域の外なのですね」

即ち今時分が出せる全力が、自分の本来の能力なのだと名由佳は認識する。世界の地図、構図、勢力圏等は名由佳の頭の中に入っていたが、ここがどこなのかまでは世界は教えてくれていなかったらしい。

「ここはどの辺りなのでしょう」

「本当に生まれたてみたいだな。ここらはガラムレインだよ。とい

うか、退魔聖域外で人間がいる地方はここくらいなもんだ」

男は名由佳の質問にすぐに答えてくる。嘘を言っているようにも見えなかった。警戒心は残しながらも、友好的に見える目の前の少年が名由佳には不思議だった。名由佳の脳裏に、世界の地図が浮かび上がる。巨大な大陸の内、人と魔との戦争が行われるようになってから、歴史の舞台は西方の六分の一度に限られていた。退魔聖域が張られているのがその一帯で、それ以外の場所で人は魔族と戦闘を行うことが出来ない。東方は魔族の勢力圏内だが、前代魔王庵考は西方、ミルスタインへの進行のため、常に自身を世界の西方に置いた。東方の地には、現在人は勿論、魔族も殆ど存在しない。

その西方、人間の国ミルスタインの勢力圏の一部に、大陸と殆どを海で引き裂かれた場所がある。大陸から帽子のように突き出たそのガルムレインと呼ばれる地方は、あまりに偏狭であるため魔族に狙われなかった。ミルスタイン王朝は魔族に襲われることのないその平和なガルムレインから物資を海路で本国へ輸送していた。

「しかし随分冷静ですね」

名由佳は思わずそう口にしていた。人間が悪の権化とされる魔王と対しているにしては、目の前の男は飄々としすぎている。先ほどの初老の男のように、背を見せ駆けだすのが一般的な対応であるだろう。

「そうでもないんだけどね。ただ人の目から逃げるためにこんな偏狭の山奥に暮らしているんだ。これ以上奥地には逃げようもないし、そっちがここいらを縄張りにするなら挨拶くらいはしておかないとな」

こんな偏狭といいながらも、少年の表情は笑みに包まれていた。

彼の過去がどうであつたかは名由佳には分からないが、彼は現状に満足しているようにも見える。

「面白い人……。名は？」

「人に名を尋ねる時はまず自分から、と言いたいとこだけだったな。礼儀もクソもないか」

少年は石の上を一步進み、名由佳との距離を縮めた。

「アインだ。とある女から初めて産まれたからアイン。どこにでもあるありきたりな名前だろ」

彼が黒髪である以上、そのとある女と何かがないはずは無いのだが、それを聞く気は名由佳には無かった。

「私は名由佳といいます。よろしく」

生まれて初めて会話を交わした相手である。名由佳は自然そう口にしていた。

「驚いたね。魔王様から人間によろしくなんて挨拶を賜るとは」

からかうように目を細めながら口元を歪めたアインに、名由佳は少しむっとする。思わず口から皮肉が飛んで出た。

「黒髪の人間など、人と魔の千年の歴史にも、それ以前の数千年の人の歴史にも存在はしない。人間だと思っているのはあなただけかもしれないよ」

「なるほど。かもしれない」

しかしアインは名由佳の皮肉を真っ向から受け止め、笑うだけだった。

「魔王様って言っても発想は人間とあまり変わらないんだな。そんな話しは生まれてこのかた何百回言われたかわからない」

確かにアインの言うとおり、誰でも目の前の男と対峙すれば、本当に人かどうかいぶかしむだろう。そういった奇異の、或いは迫害の視線から逃れるために、彼はこんな山中にいるのだろうか。

「俺のこと面白って言ってたけど、そっちも中々面白いね。」

と、仕事をすませにやなきや。信じてもらえるかはわからないけど、俺は名由佳に敵意はない。出来れば川に入らせて欲しいんだけど」

「っ」

名を呼ばれたことに少なからず名由佳はうるたえた。生まれた瞬間に自らの脳裏に既にあった自分の名を、他人に呼ばれることをむず痒く感じた。

「どうかしたか？ ああ、王様だから名由佳様とでも言ったほうがいいかい？」

「いいえ、かまわないわ。それより川に入って何をするのです？」
狼狽を隠し、名由佳はアインに質問で返す。

「魚を取るのさ。昼飯だ」

名由佳の問いを肯定と捉え、アインは一つ歩を進めた。

3話 食事

名由佳の視線は川の中に落ちていて、魚の姿を探している。彼はそのまま川の端まで歩み寄り、手に持っていた竹箆を紐で腰に括りつけた後、草履だけ脱いで川の中に足を踏み入れた。無遠慮に川の中を歩いていくので、当然周囲を泳いでいた魚は離れていく。名由佳は傍にあつた少し大きめの石の上に腰を下ろし、アインを見下ろす。「よつと……」

名由佳が冷たいと言った川の水である。天から落とされた日の光は暖かだったが、川の中は違う。にもかかわらずアインは中央より少し手前で腰を下ろした。丁度彼の肩が水につかるくらいの深さで、アインは何をするでもなくその場にあぐらをかく。

「なるほど……。たいしたものね」

名由佳が驚きの声をあげた。腰を落とすなりアインは気配を殺した。逃げ散って行ったはずの魚が戻り、すぐに彼の傍を泳ぎ始める。「人間は釣竿を使って魚を取るのが一般的なのではないの？」

名由佳の持つ知識はそうであつたし、現実に先ほど見た初老の男はそうしていた。

「普通はそうかもな。名由佳がどう思っているのかは知らないけど、普通の人間はそうそう気配なんて消せやしないよ。野生の動物のほうによつぽど得意だ」

アインは座つたまま名由佳の問いに答えた。魚達が逃げる気配は無い。

本当にたいしたものだと名由佳は思う。野生の動物とて声をあげながら気配を消すなどという芸当をするものはそうそういないはずだ。アインは普通の人間は、と言ったが、それは即ち彼が普通でないということなのだろう。

名由佳はそれ以上声をかけず、彼の所為を見守っていた。

アインはゆっくりと手を動かし、それを障害物として、魚を竹箆

の中へと導いていく。次の魚を招き入れるときは、入っている魚が逃げないように両手を上手く使い、手の平を広げきつたくらいの大きさの川魚が竹籠の中へ吸い込まれていく。

五匹の魚が竹籠の中に入ったところで、アインは腰をあげた。

「あなたなら魚を掴み取ることにくらい容易いように思えるけれど、そうはしないのね」

アインが川の中に腰を下ろしてから十五分ほど経過している。名由佳にはあまり効率が良いやり方には見えなかった。

「別に時間が無いわけじゃなし、むしろ毎日暇を持て余しているくらいだ。急ぐ必要なんてどこにもない」

なるほどと、名由佳は思う。人と戦争を始める前の魔族は、確かにそうして静かに時の中に身を置いていたはずである。

「あなた一人でそれだけ食べるの？」

アインが腰をあげれば当然竹籠から水は抜けていく。彼の腰元から下がった籠の中では魚達が震えているのだろう。がさがと揺れていた。

「いや、連れがいるんだ。一人だけどね」

「その人間も黒髪なのかしら？」

「まさか。流石にそれはないさ。変わり者であることは間違いないけどな」

アインの緩んだ表情が、彼のその変わり者への信頼感を表していた。

「そう。それならもう戻るのね」

「ああ……。どうかしたかい？」

仮にも魔王ともあるうものがそんなわけはないだろうと思いつつも、視線を下げた名由佳が不思議と寂しそうに見えて、アインは尋ねた。「私もお腹がすいているの。魚を取るの簡単だけれど、ここであなただが食べていくなら、どう食べるのかも見れると思って」

魚を焼いたり、煮たり、揚げたりして調理するという知識は彼女にもある。しかし実際にどうするかをその目で見るのはまた違うこ

となのだと、魚を取るアインを見てそう感じていた。

「なるほどね。俺も連れ以外と話すのなんて久しぶりだ。少しばかり付き合うか」

アインは笑いながら草履を向こう岸に置いたまま、名由佳の方まで歩いてくる。その笑みが酷く幼く見える。

「しかし火の用意が無いな……」

永徳は川から出るなり、向こう岸、アインがやってきた方向に視線をやった。

「一つ走り取って来るか」

「火ならば私が出せますが」

川から上がった永徳と、岩の上に座る名由佳の視線は丁度同じ高さにあった。何ということもなく右手から炎を生み出した名由佳を見て、アインの目が驚きに包まれ丸くなるのが、名由佳には酷く滑稽だった。名由佳の右手の中で、握り拳ほどの炎が揺らいでいる。

「そういえば魔王様だったな。魔術ってやつかい。どうやるんだ？」

「説明は難しいわ……。自然とできるものだし。私の知識にある理屈で説明すれば、世界に生み出された魔族という存在は、願うことにより世界に何かを生み出すことが出来る。それを人は魔術と呼ぶ」
名由佳は自らの右手にある炎を何気なく見ながら、頭の中に浮かんだどこかの人間が記したであろう言葉を口にした。

「魔王が子を産むのも人間のように自分の身体から産み落とすわけではないし。そういう意味では魔族全てが世界から生み出される。だから魔族は世界を操れるのだ」と、どこかの昔の人間の学者が言っていたはずよ。実際には魔族の内でも限られたものしか魔術と呼ばれるそれは行使できないけれどね」

「なるほど。ご高説ありがたいけど、俺にはあまり関係ないな」

人間の中の説に注釈まで加えた名由佳に、露骨に興味なさそうにアインが返す。その様子に名由佳の口元は逆に綻んだ。

「あなたから聞いておいて酷い言い草ね。それで、この火をどうす

ればいいのかしら」

「ああ、ちよつと待っていてくれ」

アインは竹箆の紐を解きその場に置いた後、木々のそびえる林の中に走って行き、すぐに両手に枝を抱えて戻ってくる。

「それじゃこいつに火をつけてくれ」

薪代わりの枝を櫓のように重ねたものをアインが指差す。名由佳は岩の上から降り、枝を挟んで永徳の逆に腰掛けた。川から出たばかりのアインが抱えていた枝は湿っていたが、名由佳が右手の炎を近づけるとすぐに燃え移った。

「いい火力だ。都合いいことにこいつは持つてきていた」

アインは竹箆の底にある鉄の細い棒を取り出す。まさかこれからそれで貫かれることを理解しているわけでもないだろうが、鉄の棒が身体に触れた魚がびくびくと震えていた。

アインは手馴れたもので、二つの棒に河魚を突き刺し地面の石の隙間にそれを差し込んだ。声をあげない魚が突き刺され、まだ息のあるうちに皮から焼かれていく様を見て、アインはふと口を開いた。「で、魔王様はやっぱ人間相手に戦争始めるのかい」

その魚を見ても、アインが残酷と感ずることは無い。それは彼らが仲間ではないからだ。そういう意味では、アインからすれば仲間でない人間と魔族が戦おうと、あまり関係の無いことであるから、まるで他人事のように名由佳に尋ねたのも不思議なことではない。

「どうかしらね。少なくとも私の知る限りでは、ここ千年で人間とこうして食卓を囲んだ魔王はいない。私も少し変わっているのかもしれないわね」

「そりやありがたいね。人間と戦争を始めるのはいいけど、ここいらではやらないで欲しいから。多少の面倒なら何とでもなるけど、名由佳相手じゃそうはいかなそうだ」

長年山中にて生きてきたからだろうか。穏やかに見える目の前の女性、しかし背を見せれば一息に自分を屠れるだけの力を秘めていることがアインには分かった。生まれて初めて自らが敵わない相手

を前にして、その事実を酷くすんなりと受け入れていた。

「そろそろいいぞ」

アインは突き刺した棒の一つを手にとって、そのまま立ち上がる。
「行くのですか？」

名由佳もまた自分の前に突き立った魚を取り、アインに尋ねた。

「ああ。連れも腹すかしているだろうからな」

「助かりました。この棒はどうすれば？」

魚を突き刺したままの棒で、ゆっくりとアインの方を指す。

「やるよ。やり方が分かっても道具がなきゃ仕方ないだろ」

アインは河を渡りながら言う。名由佳に背を向けたまま、向こう岸で草履を履き、そのまま林の中へと消えていった。

「美味しい」

アインの背が見えなくなつて、ようやく手の中の魚を口にした名由佳は、思い出したようにそう口にした。

生まれて初めて口にしたはずの食物が、名由佳には不思議と懐かしく感じられた。

4話 長女生誕

歴代の魔王達は、生まれながらに人に悪意を持っていた。名由佳も例外ではない。世界に産み落とされた魔王という存在は、まるで人を憎むために存在するかのような千年であった。

しかし初めての他者との触れ合いが、歴代の魔王と名由佳では違っていた。歴代の魔王は、生れ落ちるなり人に忌避され、恐怖され、攻撃された。それに対し名由佳が得たのは、優しくもなければ暖かくもないが、言葉と一匹の魚と生きるための道具であった。彼女はこの暖かな日差しと冷たく澄んだ水の世界で、ゆるやかに暮らしていくのも悪くはないと感じていた。いみじくもそれは人と争うことになる前の魔族が、連綿と続けてきた生活である。

魚を骨まで食し終え、水を掬いあげ口に含む。食後の水というのはまた乾いた喉に染み渡る潤いとは違った美味さが感じられた。まだ空腹ではあった。手の平ほどの魚一匹では腹は満ちない。名由佳は気配を消して、アイン同様に魚を取ろうとしたが、上手いかなかった。生まれたばかりの彼女には、気配を殺すという行為がどういうことが良く分からない。手で掴むなり、魔術で魚を殺すのは簡単だったが、それはしなかった。アインの言うとおり無粋に感じたからだ。

魔王ともあろうものが食事を少し抜いたくらいでどうなるものでもないことを、彼女は知っていた。だからあえて空腹のまま、気の向くままに再び山中を歩き出した。

今度はすぐに気づいた。人の気配が大勢こちらに向かっていた。周囲には木々が立ち並んでおり、名由佳の目に人の姿は映っていない。しかし自分の周りを囲んでいく気配を感じる。アインのそれと違い、隠密と呼ぶには滑稽である彼らの動きを感じていた。名由佳は歩み

を止め、人間であるだろう彼らの包囲が終わるのを待った。太陽が沈み始めていた。隣の山が太陽を既に隠してしまっている。赤みを増す世界を見ながら、太陽がどうやって沈みいくのか見れないのが少しだけ残念だと名由佳はぼんやりと思った。

飛んで逃げることは容易だったが、それはしなかった。自分が争いを求めぬことを示さぬ限り、人は自分を追い続けるだろう。名由佳は自分に敵意が無いことを相手に伝え、この山中を汚すことをしなくなかった。それがここで厄介を起こさないで欲しいと言っていた少年がいたからなのか、自分自身の願いなのかは名由佳には分からない。

「出てきなさい」

人間達の気配が止まったのを感じ、名由佳は一帯に聞こえる大きな声でそう言った。包囲が終わるまで口を開かなかったのは、彼らを安心させるためだった。しかしながら名由佳の声に、周囲の間は応えない。当然である。気づかれぬうちに包囲したはずの相手に、終えるなり声をかけられたのだから。

「敵意はありません。私を魔王と知っての行動でしょう」

誰一人として、出てくる様子はない。代わりに彼女に伝えられるのは、魔王が世界の誰よりも多くを与えられ続けたであろう感情。恐れ、憎しみ、殺意。歴代の魔王が人を滅ぼさんとした理由が、名由佳にはすぐ理解出来た。世界に産み落とされた魔王は、周囲の空気と他者の感情を自然と理解してしまう。魔王であるがゆえにその攻撃的な空気を常に与えられ、人ではない魔王という存在であるがゆえ、狂うことも許されなかった。

人間の幼子がこれだけの狂気に触れさせられ、仮にそれを理解したしまったとしたら、その子供はすぐに精神に異常をきたすだろう。「かれ！」

名由佳の問いかけに、彼らは言葉を返さなかった。放たれたのは、仲間への号令。枝を折り、草を踏みつける足音が響き渡る。

「大人しく縛につけ！」

木々の合間から姿を見せた数男達が分銅つきの鎖を投げつける。それらは名由佳の身体中を包囲し、すぐに締め付けた。

「これで満足ですか」

投げつけられた十の鎖に全身を縛られながら、名由佳は目の前に現れた男達を見た。一つの鎖の先には十を超える人間がそれぞれの鎖を握っており、彼女の戒めを守っていた。

顔色を変えない名由佳を恐れた人間達は、自然と鎖を握る手に込める力を強めた。しかし百人からの男達の力で締めあげられる鎖が、名由佳の肌に食い込むことは無い。

「人間と争うのは本意ではありません」

「そんな言葉を信じられるわけがないだろう！」

男の中の誰かが叫ぶ。千年の時の中で魔族が屠っただけの人間の憎悪が、今彼女に向けられていた。そして万力を込める男達の中に湧き上がる、自分達では決して敵わないのだという本能からの恐怖が。

「食らえ化物！」

男の一人が、矢を射かける。鋼鉄で出来た筈の矢は、しかし名由佳の腕に届く前にからん、と乾いた音をたてて落ちる。まるで鉄の盾に弾かれたように。

男達はいよいよ混乱し、恐怖する。魔王という存在を知ってはいても、人間の殆どがその姿を現実に見ることはない。戦場で見えるのも稀であり、見たものの大半は殺される。目の前の存在は、彼らが知る『普通』の魔族とは別種の存在なのだと理解する。

名由佳にとって、虫に噛まれたほどすら感じることはないその一撃は、しかし彼女の本能を突き動かした。即ち、魔王とは人と対する者であるという一千年の歴史。その歴史を持つ世界より産み落とされた、彼女の衝動である。

燃やすのは躊躇われた。木々を巻き添えにしなくなかった。雷を落とすのも同様だった。風の刃もそう。先ほどアインにして見せたように、彼女が願えばその全ては現実として起こるだろう。しかし

名由佳はそれらを選ばず、自らの手で彼らを屠ることにした。

名由佳の耳に、悲鳴が聞こえた気がした。その時既に百を超える男達は全て地に臥せっていた。深緑と土色に覆われた山中に、自然では起こりえない量の朱が混じっていた。

すぐ傍に彼女を戒めるべき鎖と、名由佳鎖を引き寄せるに任せられ、そのまま屠られた男達が転がっていた。丁寧に全ての心臓が穿たれていた。

「え？」

名由佳が小さく声をあげた。彼女の手には、最後に掴んだ男の心臓があった。

正気でなかったわけではない。しかし名由佳は一呼吸の内に全てを終えていた。身体が走ったという表現が正しい。男達を屠ってやろうと考えた直後、全ての男は眼前に倒れていた。先ほど自分に罵声を浴びせたものが動くことはもうない。矢を射掛けた男が口を開くこともない。それが彼女には酷く恐ろしかった。

この千年の内に生まれた魔王は全て、生まれた直後には人を殺していた。それは人が必ず彼らを害そうとしたからではあるが、その後を感じたものはそれぞれ違っただろう。

愉悦を覚えたものもいれば、儚さを感じたものかもしれない。ただ名由佳という王は、そこに恐怖を感じた。魔王という特異な存在であれ、それは単なる個体差であるのだろう。

「ああ……」

ふと静寂すら恐ろしくなり、名由佳は声をあげていた。自分が世界に存在する全てを屠れるのだという実感があった。それが怖くてたまらなかった。誰かに傍にいて欲しいと、そう願った。

それと同時に、名由佳は自分の身体から何かが切り離されていくのを感じる。それが今しがた浮かんだ願いであることは、彼女はまだ知らない。

「では、わたしがあなたの傍にいきましょう」

声はすぐそばから聞こえた。魔王が魔王たる所以がそこにあった。名由佳のすぐ横にいつの間にか一人の少女がいて、名由佳の肩に手を置いていた。恐怖から産み落とされた、名由佳の最初の子供・魔族だった。

自分がどうやってその少女を生み出したのか、名由佳は知らない。しかし少女が自分の子供であることは、本能的に理解できた。

「傍にいて……、伊礼」

心の底から放たれた願いと、何気なく出たその名前が、しかし二人にとっては自然に感じられた。

「御意」

伊礼と名づけられた少女は、それ以上何も言わず主の 否、母親の肩を抱いた。

5話 願い

魔王が死ねば、その子らが死ぬというわけではない。庵考軍は王都ミルスタインに迫るほど、人間の領土を進行していたが、庵考の死と共に退魔聖域の外まで撤退。魔王という支柱を失った彼らが、王の仇である存在を目前にしながら退いたのには理由がある。庵考の在命中に、自分が死んだ時は次代の魔王を導くのが残された魔族達の役目であると彼らに伝えていたからである。

男は玉座のある玉間の中、玉座の横に佇んでいた。魔族は魔王同様、生まれながらにその形を変えず、成長することもないが、体格などは大まかには人のそれと変わらない。男はそんな中では大柄な部類だった。名由佳と対照的な黒い蝙蝠に似た、一般的な魔族の翼を持ち、額には見事な角が生えている。翼を害さないよう、魔族が好んで用いる布を上半身に巻きつけている。腕と背と肩が、外気に晒されている。布は彼の頭髮同様に蒼く、目の奥に見える青い瞳は酷く鋭く見えた。

「敬心様、いつまでこの場に留まるのです」

玉間の扉は開け放たれていた。その向こうから、敬心と呼ばれた男とは対照的に小柄な、少年のような魔族が立っていた。

石造りであるはずの廊下を歩いてきたはずであるのに、敬心にはその足音は聞こえていなかった。

「庵考様のご命令通り、我らは新たな魔王を導かねばならぬ。魔王であれば、程なく世に聞こえるようになるであろう。人間の手に落ちればその後に奪還すればよいし、魔王自らが軍勢を率いるようであればそれに越したことはない。どちらにしろ、暫くはここに留まるしかあるまい」

此処とは、退魔聖域を出てすぐにあるエイル城のことである。人と魔の戦争が起こる前から存在していた人間の城を、魔族が改装しつつ用いているだけであって、酷く古臭かった。1千年の時を経た

その城は、古城という表現ですら似つかわしくもないかもしれない。そもそも魔族には、華やかであるとか、飾るという概念があまりない。

敬心の立つ玉間こそ、赤い絨毯をひびの入った石の床の上にひいてはいるが、それも王である庵考が使う場所であつたからであつて、その庵考も今は無い。

敬心は庵考の第一子であり、庵考が亡くなつた今、軍を率いる最高責任者であるがゆえ、玉間に身を置いている。しかし彼はその部屋にいて、一度として座することはなく、庵考在命中同様、その玉座の傍らに控えていた。

「待つしか、ないのですね……」

少年の姿をした茶髪の魔族は、悔しそうに唇を噛んだ。

「言つな杏煉。口惜しいのは皆同じだ」

魔族にとつて王は絶対であり、全てである。そうであるからこそ彼らは今すぐにでも、庵考の遣した命令を果たしたかった。しかし同じ庵考の命が、人間を滅ぼすという庵考の命令より先に、新たな魔王を確保すること命じていた。

「お前とて私ほどではないにしても永い時を生きているだろう。一年や二年など、束の間のことだ」

魔族の寿命は三百年あると言われている。事実、庵考の前代の魔王の子は既に絶えていたし、第一子である敬心は既に二百年以上も生きていた。

「そう、ですな……」

杏煉と呼ばれた魔族は、自分に言い聞かせるよう一つ頷いた。

彼らは待っている。次代の王が歴史に参上し、人間を屠るその時を。

「はあ……、派手にやったもんだなかし」

声は唐突にもたらされた。沈み始めた太陽が、それでもまだ世界に朱の色を残していた。名由佳が一連の騒動を終えるまでに、それほどに時間を要していないことを示していた。

「誰だ」

伊礼は名由佳を庇うように声と名由佳の間に立った。少年 アインは姿を隠すこともなく、茜色が薄らいでいく木々の合間から顔を覗かせた。

「そちらの魔王様の知人さ。あんた、名由佳のお子さんかい」

生まれたての魔王が傍に魔族を侍らせていれば、それが親子の関係であると考えるのは自然なことである。

「何をしにここへ来た」

厳しい表情の伊礼と対照的に、アインは薄く笑ってみせた。周囲に倒れ付いた百を越える人間と一面の血しぶきの中浮かぶその笑みは、彼にとつては死んだ男たちに何の興味も無いことを示している。「悲鳴が聞こえたんでね。ちょっと顔を出したら大方の予想通りだったというだけさ」

生まれたての魔王がいれば、人はそれを捕らえようとする。悪意を浴びれば、魔王は対抗する。アインの思考は自然なものである。

「そして貴様も王に害を与えにきたか、人間」

伊礼の中に、アインが黒髪であることに對する疑問はわかなかった。それが何故であるか、魔王以外は黒髪と黒い瞳を持つことがないと知っている、紫がかった髪を持つ伊礼自身からなかったが、アインが自分の同胞でないことは分かっていた。

「そういうつもりはないんだけど……。って言っても信じてはくれないか」

アインは首を傾げ、頭を掻いた。伊礼の目から見て、目の前の少年に敵意があるかどうかの判断は出来なかった。しかし人間が魔王と対したとき、その感情は恐怖、憎悪に包まれるのが常であるはずなのだ。そのどちらもが、アインからは感じられない。

「まずは王に頭を下げてもらおうか。その後で王を呼び捨てた不敬

を裁いてやろう」

伊礼はアインに向かい、一歩を進めた。

「なるほどそう来るか。そりゃ面白い」

アインは余裕の笑みを崩さぬまま、伊礼に対し拳を構えた。それがまた伊礼を苛立たせる。

「伊礼」

「分かっております」

名由佳の呼び声に、伊礼はそう答えた。アインが本当に名由佳と顔見知りであること。名由佳がアインに対して敵意を持っていないこと。その両方が伊礼には分かっていた。何故、という疑問はここでは意味を成さない。魔族は親たる魔王の意思を常に感じられるものなのだ。今名由佳の興味は目の前の少年に集約されている。何故目の前の少年は黒髪であるのか。何故魔王たる自分を恐れないのか。

何故、名由佳がここにいて、しかも人間を屠っているという予測がついたにも関わらずやってきたのか。

それを吐かせるために、伊礼はアインに向き合ったのだ。結果は見えている筈だった。伊礼からすれば、生まれたばかりの自分の四肢を試す程度のもりだった。人間が魔王の第一子に適う道理などあるはずもないのだと、伊礼は知っていた。ましてやここは退魔聖域の外である。前魔王庵考の第一子敬心は、万を超える人間をただ一騎で屠ると言われている。

「ふっ」

取り押さえる目的の右手が伊礼から伸びる。伊礼からすればそつと触れようとする程度の力だが、人間であれば目に映らないほどに速い。15歩はあったであろうアインとの距離を刹那の間に詰め、伊礼の右手はしかし掴むはずであった永徳の右手に逆に掴まれていた。

「一つ忠告するけど……」

アインは左の拳を握り締め、何故拘束するはずであった相手に手を掴まれているのか思考が追いついていないままの伊礼の右頬に、

思い切りぶつけた。

「がつ……」

生まれて初めて感じた苦痛。少女のなりをした伊礼の表情が歪む。吹き飛ばされた彼女は大木に打ち付けられ、地面に転がり落ちる。先ほど名由佳が殺した男の死骸の上に伊礼が転がり落ち、生まれたての彼女の薄い胸元と腰を纏っただけの黒い衣服を血に染める。伊礼は名由佳のような白い服でなくて良かったと場違いなことを考えたところで、ようやく自分を取り戻した。

「俺はこの見た目の通り、どうも普通の人間じゃあないらしい」

伊礼を殴った左手で、アインは漆黒の髪をかきあげた。

「舐めていたよ、小僧」

伊礼の唇には笑みが浮かんでいる。世界より与えられた知識に無い、目の前の男の存在が伊礼にとってもまた酷く興味深かった。人間には理解できない感覚であるうが、生まれた時既にあらゆる事象を内包して生まれてくる魔族にとって、『未知』ほど興味深いものはないのだろう。

名由佳もまた、殴り飛ばされた伊礼に意識を払わず、アインに視線を注いでいる。

「生まれたばかりの、それもガキのなりした魔族に小僧といわれてもなあ」

アインは中指を二回自分に向けて振った。挑発という行為であることは知っていても、それを不快であると感じる思考が伊礼には無い。ただ彼女は今、酷く楽しかった。

「ほざけ！」

伊礼の身体が踊る。小さな翼がはためき、再び見る間にアインとの距離を詰める。今度は加減せず、アインに向かって拳を繰り出す。アインはそれを右手で受け流し、自分の立っていた石の上から飛び降りた。木の根が邪魔をする土の上、永徳は飛来する伊礼を待ち構える。

「なるほど、こりゃ面倒だ」

伊礼の乱舞を受け流しながらでたその言葉は、余裕こそあれ本心だった。足を地に付けて戦わなければならぬ彼は、空を飛び続ける伊礼に対し圧倒的に足場が不利だった。

「化け物め」

面倒といいながら繰り出していく拳の全てを軽々といなすアインに対し、舌打ちしながら伊礼が呟く。

「まさか魔族からそう言われる日が来るとは思わなかったよ」

アインは伊礼の繰り出す肉弾を避け、いなし、時に防御した。足場の利が伊礼にあったとしても、勝敗の結果は見えている。それほど能力に差があった。

「たいしたことないな、あんたの子も」

二人が舞うのを見つめ続けている名由佳に、アインはそう笑いかけた。

「ん、なんだ終わりか？」

伊礼が拳を繰り出すのを止め、アインと距離を置き、地に足をつけていた。

「名由佳様を侮辱するのは許さん」

アインは気づいていない。魔族に対しての禁句を放ったことに。

「本業で相手をしてやる。もっとも、こちらでは一方的になっつまうが……」

「何を言って……」

伊礼の瞳が、アインの瞳を射抜く。

「しまっ……」

気づいた時には既に遅い。魔族が用いる術であるから魔術。それは必ずしも名由佳が先に見せたような、炎を出すといったような『現象』だけではない。

アインの思考は、伊礼のそれに支配される。

『跪け』

脳に直接響くその声に、アインは抗えない。土の上に膝をつき、伊礼に対してではなく、名由佳に対して向き直る。魔術については

語るべきは多いが、今は省く。

「黒髪の人間といつても、たいしたことはないな」

先ほどの意趣返しに、伊礼は跪いたアインに対して嘲う。

「本業は精神戦か……。一本取られたな。油断してた」

「まるで油断をしなければ屈しないとも言いたげだな」

「やってみなけりや分らないね。正直今話せるのもそつちが手を抜いてるからだろ」

アインは自分の身体の自由がまるで利かない状態でありながら、口だけがその拘束から漏れていることに気づいていた。

「伊礼、もういいわ」

跪いたアインから興味を失ったように、名由佳は視線を伊礼に移した。

「しかしこいつは……」

名由佳を侮辱した、と伊礼は言いかけて止めた。いつであつても、王の命は絶対である。

「つと、動くうようになつたな」

地面に膝はついたまま、アインは首をこきこきと振る。金縛りそのものである伊礼の魔術が解かれていた。

「たいしたことないっていうのは取り消すよ。悪かった」

アインはそのまま、伊礼に対し頭を下げた。

「わたしに頭を下げてどうする！ 王に下げろ、王に」

「え？ いやこの場合はお前だろ」

「わたしのことなどどうでもいい」

頭を上げて伊礼に反論するアインに、伊礼は謝られたというのに苛立ちを足で地を踏みつけることで示す。

「ふふっ」

「お……、笑つたね魔王様」

「くす……。すまない、何故がおかしくて」

名由佳に笑うための知識は存在しない。人間が何を面白いと感じ、過去の魔族が何に笑ってきたか。その知識はあつても彼女自身の笑

みは違う。彼女はまた一つ未知に触れた。

「やはりあなたは面白いわね」

アインに向ける名由佳の視線が、ゆっくりと細まる。

「一つだけ、試してもいいかしら」

「何をだい？」

名由佳は尋ね返すアインに答えぬまま、足を崩していた体制から人の目、否、この場にいるアインと伊礼にすらうつらない速度。世界が産み落とした魔王の速度を持ってアインの胸へと右手を伸ばした。

刹那の後、名由佳の右手はアインに掴まれている。

「殺気が無い分性質が悪いな」

アインは口こそ笑みの形に歪めていたが、その頬に冷や汗を流していた。名由佳の人差し指と中指がアインの右胸に触れている。つまりアインが右手を掴んだのは、名由佳の手が右胸に届いた後である。

「王がその気であれば致命傷だな」

伊礼の表情に色は無い。それが当然。魔の力を極端に制限する退魔聖域の外であれば、魔王の一撃を受けることが出来る者などいるはずがない。

「そうね、致命傷ね……」

再び、名由佳の顔には笑み。しかしそれは楽から来るものではなく、嬉の笑みである。

「けれど、死ではない」

襲った名由佳には良く分かった。今の一撃を、全力を持って放ったとしても、それがアインの心臓までは届かぬことが。右手首に伝わるアインの放つ束縛の力の強さが、それを

確信させる。

「死はない……」

名由佳の脳裏に、先ほどの光景が甦る。世界から与えられたそれではなく、自らが経験した鮮明な景色。自らを襲った人間の血に塗

れた、死体の群れ。そして現実^に今三人を囲む、死骸の山。

「止めてくれる、あなたは」

魔王が正気を失っても、理性を取り戻すまでの間生きていることが出来る人間。そんな存在は歴代の魔王には存在しなかった。だからこそ、歴代の魔王達は自らの子、魔族としか対することがなかった。魔王にとって全ての魔族は子であり、子である魔族にとって王は絶対である。人間と魔族の戦争が始まってから、初めて魔王が『他者』に触れた瞬間だった。

「あなたの、傍にいたい……」

自然と溢れた涙とともに、生まれて初めての願望が名由佳の口から零れていた。

6話 生きるために出来ること

アインは悩んだが、二人を自分の住処に連れて行くことに決めた。先ほど名由佳はアインの右胸に手を触れて死なないと呟いたが、アインからすれば殺せる、即ち殺すことが出来る、であつただろう。生まれてから既に人間離れにした力を持っていたアインにとつてもまた、名由佳という自分を越える力を持つ存在が希少なものであつたのである。

地を失踪するアインに対し、最初は名由佳も伊礼も空を飛んでいたが、途中で降りて共に走つた。空で駆けるにはいささか木々が煩わしい。日は沈みきっていたが、三人は障害物など何も無いかのように山中を駆け抜けていく。

「着いたぞ」

アインが走るのを止めたのは、一つ山を越えた先の山中の拓けた場所に山中にあつて起伏がなく、ぽっかりとあいた木の生えていない場所だつた。木で作られたまさしく小屋といった概観の建物が二つ並んでいる。

「帰つたぞ、じーさん」

常人であれば半日はかかる距離を駆けてなお、三人の息は切れていない。アインはいつものように二つの小屋のうち、少し大きい右の小屋の扉を開いた。

「遅かつたな。　　なんだ、連れてきたのか」

小屋の中で、初老の男が出迎えた。アインが名由佳に言っていた連れである。山奥で暮らしている割に、まだ薄くならない白髪と、豊かともでは言えない程度の髭は手入れがされている。名由佳と同程度の成長期のアインに比べ、大分背が高かつた。高めの椅子に座つた状態で、伊礼と同じくらいの高さがあり、肉体自体は山の男とくに相応しく、シャツから除く両腕からは筋肉が覗いている。

「ああ。俺と一緒にいたいんだつてさ」

「なるほどな。そりゃあ連れてくるだろう」

アインの言葉に、男はかっかつかと声をあげて笑った。アイン相手に傍にいたいなどと言った相手は、今まで存在しなかったからだ。

「……」
名由佳は口を開かず、故に伊礼も口を開かない。魔王と魔族が尋ねて来たというのに、目の前の初老の人間はそれにまるで危機感を抱いていない。

「どうしたそんなところに突っ立って。あんたらも入って来い。ま、汚いところだな」

中に入った永徳についていかず、外に立ち尽くしている二人を中に招く。名由佳は戸惑いながらもその言葉に従い、伊礼はその名由佳に従った。

「椅子が足りんな」

二人しか暮らさないこの場所には、椅子もまた二つしかなかった。4人がいても手狭というほどではないが、そう広くない小屋の中央に両手を広げたほどの大きさの机があり、その両側に椅子がある。両方とも木製で、一つは男が既に座っていた。

「俺はここでいいから、名由佳座れよ」

アインは入り口から見て初老の男の手前奥にある、藁が敷かれたベッドの上に腰掛、普段彼が使っている、男の正面の椅子を名由佳に勧める。

「伊礼は」

「いきなり呼び捨てられるとも思わなかったが、わたしはここでいい」

名由佳の後ろに控えたままの伊礼にアインが視線を移すと、伊礼は空いたままの椅子の後ろにある壁に背を預けた。

「立ったままでは話も進まん。いいから座りなさい」

初老の男に再度促され、名由佳はようやく椅子に腰を下ろした。

「それじゃあまず挨拶か。ガラという。そっちは？」

「名由佳といいます」

「伊礼だ」

名由佳が座るなり自己紹介を始めたガラに、尋ねられるがまま二人は答える。

「んで、暫くここに住むのか？」

ガラは奥の藁の上で胡坐をかくアインに視線を移す。

「分かんないなあ……。でも名由佳が俺といたっていうならそうなるんじゃない？」

落ち着きがない性分なのか、体を左右に揺らしながらアインは答える。

「それじゃ明日は椅子やら何やら作らんなあ。いや、久々にやらなきゃいけないことが出来た。最近葉巻作りしかやってなかったし、いいことだ。それじゃこれからどうするかを話すとするか」

「待つて……」

アインと二人、話を進めるガラに、名由佳が待ったをかける。

「ん、どうした？」

「ご覧の通り、我々は魔族です」

名由佳は右手で自らの羽根に触れる。

「そうだな」

「私は、魔王です」

「らしいな。さっき魚持ってきた時に聞いた」

だからどうした、とでもいいいたげである。

「恐ろしくは、ないのですか……？」

アインの傍にいたいと思ったのは、アインは自分の手ですぐに死ぬことがないと分かったから。しかし、目の前の男は名由佳に殺意さえあれば、そつと撫でるように触れるだけで死んでしまう。既に百からの人間を屠った名由佳にとって、それは何よりも恐ろしかった。

「ふむ……」

ガラは硬い植物の皮で包まれた葉巻を取り出し、テーブルの上に乗せられたランプの炎で火をつける。

「一ついいことを教えてやろう、生まれたてのお嬢ちゃん」

口から煙を吐き出しつつ、ガラは微笑んだ。

「伊礼つつた後ろの嬢ちゃんもだぞ」

「な」

名由佳を守るよう、警戒を緩めずにガラに視線を注ぎ続けていた伊礼は、急に話を振られて小さく声をあげた。

「俺はな、まあ見ての通り多少ガタイはいいが、所詮は普通の人間だ。アインのような化け物でもなけりゃ、あんたらみたいな魔族でもない」

「化け物は酷いな……。昔は毎日言われてたけど、日に二回も言われたのは本当に久々だ」

相変わらず体を左右に揺らしながら、アインは唇を尖らせる。

「ちゃちゃを入れるな。で、いいか嬢ちゃん。普通の人間ってのは、殺意があれば人間を殺すことが出来る。それはお互いにだ。分かるか？」

こくりと、名由佳は頷いた。葉巻を咥えたまま、煙越に見えるガラに対し、伊礼もまた言葉を紡ぐ気にならなかった。

「人間ってのは常時警戒なんてしていると精神が持たない。つまり、気が緩んでいる時に刃でもって後ろから斬りつければ終わり。短刀で刺すだけでも大抵は足りる。だからな」

アインの体の揺れが収まった。それはかつて、アインがガラから聞いた言葉であろう。アインの傍にいたいと言ったのは名由佳が始めてだが、傍にいても良いと初めて言ってくれたのが、目の前の男である。

「俺からすれば他の普通の人間もあんたらもかわらねーのさ。殺意を持たれたら終わりなんだからな。あんたらは俺の目の前に現れた。そしたら俺に出来る防衛の手段は、あんたらに殺意を抱かせないことだけだ」

だから

「だから」

傍にいてよいのだと。

「気がすむまでここにいといるといい」

肉体的に異質であるアインという存在と、精神的に奇特であるガラという人間との出会いが、名由佳にとって生まれて初めての日の接触だった。千年のうちに存在しなかった魔王と人間のこのような出会いのために、長年不動とされていた世界の歴史は変わり始めることになる。

7 話 戦時の政治家

ガラムレイン。退魔聖域の外にありながら、そのあまりにも辺境であるがゆえに、平和を許された人間の国。ガラムレインは地方の名であり、城もまた同様にガラムレイン城という。人間の城の多くは広大な土地を用い、階層を殆ど作らない平面的なものであり、王座はその中心に据えられる。対して名由佳以前の魔王により建てられ玉族の城は、階層を多く用い、縦に長く、前王庵徳の居城の階層は八にも及んだ。

理由は二つ。一つは人間の身体能力的に、高くに石を積み上げての建築が難しい為。

長い時をかければそれも可能であるが、魔族がいつ攻め寄らんとも分からぬ情勢でそのような時間と労力を取る意味がない。第二の理由は至って明快であり、空を翔る魔族相手に高低における防御は用を成さず、逆に人間側の防御が難解となるからである。

端的に説明するのであれば、この世界には無い言葉ではあるが、人間の城は中華式であり、魔族のそれは洋式である。

話を戻す。現在の人間の統一国家であるミルスタイン。その現王カズラが第三女であるオルファ・ヴァルガードがガラムレインを治めている。齡二十三という若さで現王カズラの兄弟を差し置き、ガラムレインの知事となったのが二年前。希代と称されるその内政能力を持って、ガラムレインは魔族との戦時にあり、本国に十分な物資を送り届けつつ、統制された地方であった。皮肉なことに、その統制が魔王庵考の死を持って初めて崩れようとしている。すなわち、魔王名由佳の誕生である。

その魔王名由佳の誕生について話すため、オルファは一人の老将とともに私室にいた。

オルファは身近に側近を置かず、重要なことは全て自分で決めた。重臣を作ればそれだけ決定事項は現実性や有効性を増すが、同時に

迅速な対処が出来なくなる。だからオルファが相談をするのは、内政面でなく武力面で統率を行っている目の前の老将とだけである。

ゆえにオルファは身を玉間には置かず、仕事は全て私室で行っていた。彼女の部屋は当然統治者にあてがわれるべき、誰よりも豪華で大きなものである。しかし彼女と老将がいる部屋から、そんな様子はまるで見れなかった。机の周りには書類が散乱し、オルファは紙の中に埋もれるようにして椅子に座っている。寝室は別にあり、そこらは侍女に掃除をさせているが、書斎にはその場にいる老将以外誰も入れなかった。

「オルファ様、どうなさいます」

下手に書類を踏まないよう、入り口からすぐの場所で老将は尋ねる。

「そうですね……。ベルムント將軍は、どう思います？」

オルファは目を通していた書類に自らの印を押してから、ようやくベルムントと呼んだ老将を振り返った。

「長年の我々人間の目標、魔王を殺さず拘束し、この戦争を終結させる……。その機会は魔王の死ぬ数百年に一度しか到来せず、当然この機会を逃すべきではない、ないのですが……」

魔王がどこに産み落とされるか。それは誰にも分からない。

「退魔聖域の外であるここで、魔王を相手に矛を向けてもいたずらに死人が増えるだけ」

ベルムントの噤んだ言葉の先を、オルファは引き継いだ。

オルファの手には、先ほどと違う書類がある。ガラムレインの中でも更に偏狭のクロイズ地方にて、魔王を捕獲せんとした百二十七名が死亡と、その書面には記されている。

「正規兵を持っても、結果は変わらないでしょう」

それはこの地方の武を統括するベルムントに対しての侮辱にはならない。しかしオルファと共にガラムレインに赴任する前、本国にて魔族との戦争が続けてきたベルムント相手に、魔王の捕獲が可能であるなどと楽観論を語ることの方が、よほど無礼であることを才

ルフアは理解している。

「いかに魔王とはいえ、十万を越える大軍を擁すれば殲滅は可能でしょう。しかし捕獲できるとは思いません。何より十万を越える大軍を本国から輸送しては、全魔王庵考の残党への防備が手薄になってしまう」

オルファは言って、こともなげにその書類を握り潰した。

「だから、もみ消しましょう」

「は？」

オルファはその書類をゴミ箱に放り投げ、ベルムントに微笑んだ。長い金髪が窓から差し込む日の光に輝く。その笑みがあまりにも今の事態と不釣り合いに美しく、ベルムントは呆けた声をあげてしまう。「どうにもならないならどうにもしない。今は見こそが一番でしょう」

「恐れながら、時を与えることはきやつらに利しますぞ。魔王が時とともに子である魔族を増やせば、それだけ我らは不利になります。ほぼ魔王単機であろう今を逃しては……」

ベルムントの発言は当然であり、正論である。

「しかし手持ちのガルムレインの兵力二万ではそれを捕獲できない。仮に殲滅が出来たとしても新たな魔王が誕生するだけで、事態は好転しません。本国からの兵の輸送も出来ない。そうなればこちらから動いてもいたずらに死者を増やすだけです。魔王が偏狭であるこの地に見向きもせず、本国へ侵攻するなり、庵考の残党と接触するのであれば、ガルムレインは今まで通り本国への支援を行えば良い。魔王が軍勢を率いてここを襲うのであれば、そのときは……」

「そのときは？」

ベルムントは希代の政治家の言葉に耳を傾ける。

「退魔聖域のある本国へ逃げましょう」

しかしそれは誰にでも思いつく解答であった。

「魔族は海を越えるほどの飛行能力はなく、過去船を使ったという話も聞きません。だから攻められたら船で逃げればいい。そうすれ

ば少なくとも無駄に二万の兵力を失うことはありません」

オルファには笑みが浮かんだままである。ベルムントは娘というにも若いくらい年の離れたこの上官の笑みに弱く、口を嚙む。

「だから船の用意だけは行います。早速手配を始めましょう。ベルムント將軍は市民を含め避難訓練の強化をお願いします」

この誰にでも思いつくことを、しかし誰よりも手際良くこなすがゆえに、オルファは希代の天才ではなく、希代の政治家と称された。「御意。しかし、その兵と全ての女子供を連れて行くだけの船は…」

この当然のように魔族に人が屠られていく時代には珍しく、ベルムントは人情家であった。年で刻まれた眉間の皺をより深くし、そう呟く。

「残念ですが」

オルファの顔から笑みが消える。

「その時は、見捨てるしかありません」
政治家と呼ばれるに相応しい、感情を映さない顔がそこにはあった。

「しかしミレナ山脈といえば何かあったような……」

オルファの呟きは、ベルムントには届かなかった。ミレナ山脈はオルファが赴任当初に見た資料の中に、黒髪のいる山と記されたものであることまで、オルファはその時気づけなかった。

8話 日常

その日も山奥で暮らすアイン達にとつては何気ない一日だった。

アインと名由佳が朝食の準備をしている。小屋の戸は朝方には開けられていて、新鮮な空気を小屋の中に入れていた。名由佳は小屋の外で昨日取っておいた山菜を洗っている。台所というには粗雑な作業台は小屋の入り口からすぐに左手にあつて、開け放たれた戸からは名由佳がしゃがみこみ、山菜を洗っている姿がアインには映った。アインは熊の肉が載っている作業台の上に視線を戻す。肉は先ほど名由佳によつて焼かれたばかりでかなり熱いが、アインにはあまり気にならないらしい。焼けたての肉を手で固定しながら、肘から手くらいまでの長さはある包丁でさくさくと切り分け、時折ガラが街まで行つて手に入れてくる塩を振り掛ける。朝から中々に重い献立だが、山で暮らす彼らからすると普段通りの朝食だった。

伊礼は椅子に腰掛け、ガラが所有している書物を読んでいる。最初は名由佳が雑務をすることに反対した。分担制であることをようやく受け入れた後も、名由佳が作業中は傍に控えていたが、名由佳自身に諫められて最近は時間があれば本を読んでいる。世界からあらかじめ与えられた知識と、自らが学習し覚えていくことで整合させていくという作業の感覚は、おそらく人間には生涯分らないだろう。

「おー、おはようさん。あーさみい……」

のそのそと、ガラが小屋の一番奥の寝台から起き上がり、伊礼とアインに声をかける。ガラが小屋の一番奥を自分の寝床にしたのは、常人には朝の冷たい空気は中々に耐え難いからであろう。

「最近随分起きるのが遅くないか……。昔はさんざん山で暮らす人間なら太陽が昇る前に起きるのは当然だって言つてたくせに」

アインが振り返ると、ガラはまだ毛皮で作られた布団から出ようとしていない。呆れてすぐに作業台に目を戻す。

「そりゃまあ、お天道様が昇ってくれないと俺みたいな普通の人間は何もできねーからなあ。ただ魔王様がいらっしゃってからそうでもなくなっただからよ」

ガラは寝台の上で胡坐をかき、布団でしっかりと身を包む。

「朝やればよかるうに」

伊礼は紙面から目を上げぬまま、ため息をつく。名由佳の炎によって、本来山奥で暮らすガラにとって貴重である光は日常のものとなった。最初に燃えない炎を名由佳が出したときのガラの喜びようが尋常でなかったのも、仕方がないことかもしれない。

「分かつとらんねえ伊礼。やれなかったことをやれるのが楽しいのさ。ま、すぐに飽きるだろうがな」

ガラの夜更かしが始まってまだ二週間程度である。伊礼は何も答えず紙面を捲った。アインとガラが名由佳と伊礼のことを呼び捨てるのは、大分前に慣れていた。

「それじゃ、ご飯にしましょう」

山菜を入れた籠を手にも由佳が小屋の中に戻り、四つに増えた椅子が備えられた机の上にそれを載せる。アインが切り分けた肉をその隣に乗せ、今日の朝食の準備が整った。

「いただきます」

『いただきます』

手を合わせ言うガラを、三人が追う。アインとガラの二人の生活であった時から決まっていた大半のことを、名由佳と伊礼は受け入れた。

「しかしまあ、名由佳が来てから色々楽になったよなあ」

中央に置かれた肉を手掴みし、ガラが口の中に放り込む。

「昔は熊なんて獲ったときは暫く熊漬けだったが」

今口にいる熊の肉は、既に二週前に獲ったものだ。

「魔術つてのは便利なもんだよなあ。名由佳は凄えや」

もう一つある食材や道具をしまっただけある小屋を名由佳が冷却するようにしてから、確かに食材の保存効率は格段に良くなった。ア

インは名由佳を褒めるが、名由佳はいまだに褒められるのはあまり慣れていないらしい。白い頬を朱に染め、謙遜する。

「特別にたいしたことはしていませんが」

「王の力を家政婦のように使うとは……」

褒めるガラとアイン、照れる名由佳と対照的に、伊礼は一人だけ不服そうである。すぐにガラがそんな伊礼にちゃちゃを入れる。

「それならお前がやりやあいじゃねえか」

名由佳が肉を焼いたり、灯りを点したり、食材を冷やしたりするようになつてからもう既に何度繰り返し返されたか分からないやり取り。結果が分かっているにもかかわらずガラが同じ発言を繰り返すのは、完全に伊礼をからかっているに過ぎない。

「出来るものならやっている！ 私の魔術は精神面が本分で、現象の類は不得手なんだ」

その理由が名由佳の恐怖という感情が伊礼を産み落としたことに起因することは、誰も知らない。アインもまたガラに便乗して伊礼をからかう。

「不得手っていうか出来ないんだろ。素直に言えばいいのに」

「つ、魔術に頼って生きる人間の話など、わたしは聞いたことがないぞ」

伊礼の肌は小麦色で、名由佳と違い見た目には分らないが、仮に彼女が白い肌であったとしたら先ほどの名由佳同様、今の伊礼もまた顔を朱に染めているだろう。もっとも照れではなく怒りからではあるが。

「そんなこと言ったら魔族と、それも魔王様と暮らしてる人間なんて古今東西聞いたことがねーぞ」

「そうだそうだ」

毎度のように伊礼が二人の煽りに反応し、冷静に切り返すガラにアインが便乗する。

「くっ……」

「二人とも、そのくらいにしてあげて」

言葉に詰まる伊礼に、名由佳が代り口を挟むが

「伊礼は良くやって付けている。私の仕事を取らない辺りが特にね」
助け舟を出したというわけでもないらしい。

「名由佳様まで……」

伊礼が情けない声をあげる。普段気丈を装っていても、名由佳に茶化されると急に勢いを無くす。

「冗談　とは言い切れないわね。伊礼が何でもかんでもやってしまっていたら、私はここにすることが出来なかったかもしれない」
名由佳の目が細まり、薄く笑う。

魔王に仕事というものが他者に与えられたこともまた、過去存在しなかった。王は自らの意思を現し、それに臣下である魔族が付き従うのが常であった。この辺境の山小屋に置いて、与えられたこなすべき仕事があることこそが、名由佳がここにすることが出来る理由の一つであるのだろう。

「しかし一年か。中々にあつという間だ」

ガラは壁にかけられた暦を記す布を振り返る。成長期のアインの背が名由佳に並び、抜いたのはつい先日のことだった。

「正直お前らを迎え入れたとき、ここまで何も無いとは思わなかったけどな」

机の上の食事をあらかたかたし、ガラは椅子の背もたれに寄りかかる。

「人間の本来の目的、目標と今の我々の行動は合致している。まだ連中の疑念はあるだろうが。時間が解決してくれるのであればよいのだが　ご馳走さま」

伊礼が食後の挨拶を飛ばし、くつろぎ始めたガラを見て、自分で食事を終える挨拶をする。

「労せず目的を果たせるなら、無駄な苦労もすることないさ
ごちそうさま」

アインは伊礼に比べると楽観的だ。彼らの言う人間、ミルスタイン王朝の目的と言うまでもなく、生まれたての魔王を監禁し、戦

力、即ち魔族を生み出させずに平和を得ることである。

「場所が良かったのかもしれないな。ミルスタインの国土でありながら偏狭。はるか東方の魔族の地で何の動きもなければ不気味だろうが、ここなら魔王が動けばすぐに情報は入る。加えて本国までは距離があるし、何かあった後に対処するだけの時間はあるだろう」

ガラは自分の生というものに関心が薄く、アインはその人間離れた強さゆえに二人とも恐怖こそしていなかったが、名由佳と伊礼がやってきてから暫くは、すぐに国軍が来るのではないかという不安を常に抱えていた。時間が解決するとは良く言ったもので、二人の不安は一年という時間が解決させようとしている。尤も、問題の解決ではないのだが。

「このままずっと 少なくとも三十年くらいはこうしてここにいられると良いのですが。ご馳走さまでした」

いつも食事の遅い名由佳がそう言つて、彼らの朝食は終わる。

「三十年つてのはどっから出てきたんだ？」

一年たつてもアインの落ち着きのなさは変わらないらしく、食事が終わるとすぐにベッドに腰掛、身体を左右に揺らし始める。

「最低限、ガラさんが亡くなるまでの話ね」

「俺に後三十年生きろつてか。それでも結構いい年だぜ？」

「そついや最近抜け毛多いよな」

「気にしてることをあつさり言うんじゃないよアイン！」

「やれやれ……」

伊礼が苦笑しつつ立ち上がり、卓上の食器を片付け始める。調理が名由佳の仕事であれば、片付けが伊礼の仕事だった。

「本当に……」

伊礼はそのまま小屋の中で騒がしく話し続ける三人から抜け出て、食器を抱えたまま小屋を出る。

「このままであれば良いのだが」

中の人間に聞こえぬよう、外に出てからそう呟いた。

アインとガラの不安は解決されても、名由佳のそれはそうではな

い。常に今の生活に終止符が打たれることに不安を感じ、恐れていた。

「本当に……」

そう繰り返す伊礼にとって、王の不安こそが彼女の不安であり、王の恐怖こそ彼女の恐怖であった。魔族にとってそれは当然であり、王こそが全てなのである。だから名由佳の願い通り、この生活が続くことを彼女は願っている。

「さて、はじめるか」

一年続けてきた食器の水洗いを始めた彼女自身もまた名由佳同様の願いを持っていることに、まだ彼女は気づかない。

2部 黒髪の女 第1話 進軍

「一年、か」

エイル城の玉間には四つの影があつた。庵考の第一子敬心が玉座の横に立ち、他の三人は玉座よりも三段下げられた謁見の場にいる。魔族の作り上げた退魔聖域内へ侵攻する足がかりとなるこのエイル城は洋式、魔族式の城で、四人がいるのは赤い絨毯が敷かれた上である。

「人間に囚われたか、或いは何かを待っているのか……」

敬心の言葉に、三人は答えない。

「我らが動くのを待っているという可能性もある。以前から決めていたことだが、一年経つても新たな魔王の動きがない以上、我らも行動を再開する」

「進路はどちらになさいます？」

杏煉という少年のような魔族が、敬心に尋ねる。

「アズサラムにするか」

エイル城から北の北。庵考が存命中に退魔聖域内に侵攻したときも、あまりに戦術的な拠点からかけ離れていた偏狭であるために捨て置いた地方である。

「我らが庵考様の遺言により退魔聖域内より撤退し一年経つとはいえ、我らが支配していた地域にはまだ人間どもの姿はあまりないだろう」

庵考存命時、魔族軍は退魔聖域内においてすらその勢いは激しく盛んであり、次々とミルスタイン王朝の城を陥落させていった。庵考の死により退却したとはいえ、それらの地に僅か一年足らずで人間達が戻っているとは敬心にも思えなかった。

「庵考様が亡くなられて一年……。遺言であるゆえ仕方ないとはいえ、相応の人間どもを供物に捧げねばな」

つまりアズサラムへの侵攻は戦術的意味などなく、ただ殺戮のた

めに向かうと、敬心はそう言っている。

「派手にやらねば新たな魔王殿が気づかれない可能性もある。進路はアズサラムへとる。虎狼、出陣だ」

「心得た」

虎狼と呼ばれた三人の中央に立っていた大柄な男が頷く。灰色の肌と、白髪と同色の髭が伸ばし放題になっている。魔族の外観は年齢に関係ないとはいえ、人間であれば相当な

年齢に見えるが、衣服を纏っていない両腕から見える隆々たる筋肉がそれを否定しているようにも見える。

「杏煉はここに残れ。退魔聖域外に侵攻してくるほど人間どもも馬鹿だとは思わんが、念のためだ」

「了解しました。では早速兵らに伝達して参ります」

杏煉はそう答え、玉間を出ていく。虎狼と呼ばれた男も、それに続いた。

敬心は出て行く二人を見送ってから、最後に残った少女の外観をした魔族に声をかけた。少女は何故か一人だけ正座しており、見えるか見えないか程度の角と翼が、敬心には酷く頼りなく見える。

「お前は どうする？」

「どどど、どうするとおっしゃいますと!？」

いきなり酷くどもる相手に敬心は溜息をついた。

「俺にもお前をどう扱えば良いかわからんだ。何せ庵考様から何も窺えておらん……」

「わ、わたしにも分かりませんよう」

責められていると感じているのか、彼女の目には涙が浮かび始めていた。敬心は再び溜息をつく。

「まあよい……。ここに残るか、我らについてくるかは好きにしろ」

「は、はい。分かりました!」

言って彼女は立ち上がり、何故か目の上に右手を乗せて敬礼する。

「牡丹」

「はい」

初めて敬心が、彼女の名を呼ぶ。

「お前は庵考様が今際に遣された最後の子だ。お前に庵考様から遣された何かがあるはずだ。それを探せ」

それは敬心が常日頃から牡丹に言ってきたこと。牡丹が他の魔族兵のように機械的に生み出されたのではなく、庵考にとつての敬心や名由佳にとつての伊礼のように、感情から生み落とされた以上、牡丹の存在には必ず何かがあると敬心は考えている。

「は、はい……」

牡丹は答えながらも俯いた。敬心の言葉とは裏腹に、牡丹の戦闘能力は酷く低く、牡丹自身が何か庵考の意思のようなものを感じることはなかったからである。

「失礼、します……」

牡丹はもう一度敬心に頭を下げた後、玉間を後にした。

「んで、どうすんだお前は」

玉魔の外で牡丹を待っていたのは、全身黒い肌で覆われた長身の男だった。

「しゃ、射絶さん」

髪は無く、露になっている頭部の皮膚から一本の角が生えている。

「どうすんだよ。お前が決めにや俺は動けん」

射絶は杏煉が牡丹につけた護衛だった。敬心が特別視する以上牡丹を守らなければならないが、魔族でありながら自衛するには牡丹は弱すぎたからである。

「行ってみようと、思っています」

「アズサラムにか？　ったく、面倒だな」

戦場で他者も守る経験など、射絶の百二十年の生において存在しない。王である庵考は射絶に千倍する力を有していたし、他に守るべきものなどいなかったからである。

「敬心様のおっしゃるように、考えたいんです、わたしも」

「ほお……」

射絶のしかめ面が驚きのそれに変わる。

「どうしてわたしが遺されたのか。その意味を。そのためには、その……。少なくともこのままじゃいけないって」

同じ魔族にあつて頼りないと称されてしまうほど情けない牡丹という少女に、しかし今は意志の光が宿っている。

「そ、その。射絶さんにはご迷惑かとは思いますが！」

しかしそれも束の間のこと、すぐに牡丹は射絶に頭を下げる。

「まあいいさ。お前を守るのは面倒だが、ここで待機させられる杏煉様よりやいい」

「わ、わわ」

射絶は笑みを浮かべる。生まれて一年牡丹は射絶とともにあつたが、彼が笑うのを見たのは初めてかもしれない。

「何せ、久々の戦場だから……」

戦争が始まる。名由佳たちはまだそのことを知らない。

2 - 2 黒髪之女

地下書庫と外を繋ぐ唯一の穴からいつものように食事が差し出される。彼女はいつものようにそこから食事を取り出す。名前は無い。そもそも呼ばれたこともないし、彼女自身自分の名前など知らなかった。知らないというよりも無いというほうが的を得ているだろう。

生活に不自由を感じたことはない。

退魔聖域の範囲の端にあるこのアズサラム城の地下書庫に幽閉され続け、既に何年になるかは分からない。いかんせん、彼女は太陽の光というものを生まれてすぐここに入れられた後、見たことがないのだ。

良く生きているものと、彼女は自分でも思った。

水だけは自由に汲み出せる場所があるにはあるが、そういう話ではない。

彼女にとって幸いだったことは幽閉された場所が書庫であったことだ。彼女は片っ端から書物を読み続けた。その内に余計、自分が異常であることを理解させられた。今のこの環境は、常人に耐えられるものではないということを、彼女が書物より知りえた知識が教えていた。

生まれて何年経つかも彼女は覚えていないが、書物で読む限りの平均的な人間の成長と見比べれば、既に成人しているのであるというくらいしか彼女は認識していない。二十年という月日は経過しているのではないのか、と思うくらいだ。

しかし平均的な人間の成長と比べることに意味などないのかもしれない。彼女は自分が本当に人間であるかにも疑いを持っていたからだ。

幸いにもまだまだ地下にある書物は読みきれなかった。人生の殆どを読書に費やしてきたにも関わらず、まだ読み終わった本は三割

といったところだった。まだ見ぬ書を読み解いていけば、何か答えが見つかるかもしれない。それにしても自分を捨てるためだけにこれだけの書物を数十年誰も利用しないとは、何という宝の持ち腐れだろうと彼女は思った。

物心がついた頃には既にここにいた。不思議なことではあったが、彼女は誰に教えられるでもなく、言葉というものを理解できた。その点についても、彼女が自分を人間であるのか疑っている点の一つである。書物にある人間とは、教えられて初めて言葉を覚えるものだからだ。

一人だけ、この場に来る人間がいたことも覚えている。物心がつく前、その女性が自分を育てたのだらうと彼女は考えていて、事実その通りだった。しかし普通の人間よりはるかに成長の早い彼女が、一人で歩き、食事を取るようになってから、その女性は現れなくなった。今ではこの場を訪れる者は存在せず、一つだけある動物が入りするための代物のような扉から、ある一定の時間を置いて衣服と食事が放りこまれるだけだ。

その衣服と食事が無くなるから彼女は生きていると判断され、食事と衣服が届き続けている。

通常の子供であれば四つの手で這うまでに半年程度の時を要し、二つの足で歩くのに一年以上かかる。時間というものに触れたことがない彼女には、正確にその意味を理解することはできなかったが、すくなくともそう短い時間ではないことは理解できた。

生まれてすぐ言語を理解し、自らの足で歩む人間などいない。それはそう。まるで書物にある魔族のようだと彼女は思った。だが彼女には角も無ければ翼もない。

ただ一つ、人よりも魔に近いであろう点を彼女からあげるとするのであれば……。

彼女はただ一枚だけこの大書庫にある鏡の前に立ち、自らの姿を見る。

書物にはこうある。

『魔族、人間、古くは聖人を含めても、髪の色というものは朱、銀、茶、緑、多数存在したが、黒髪だけは存在しない。ただ一人、魔族の王足る者を除いては』

彼女が忌み子と言われ、ここに幽閉された理由はその書物を読んだ後理解出来た。

別段彼女は父を恨んでもいないし、今の生活にも不満もなかった。

ただ時折ふと思った。

彼女は人間との付き合いをしたことがないから、今一感情というものとは理解できなかったが、書物の小説などから得た知識からすれば人間の王から黒髪の娘が生まれるとは　　ああ、それは何と言う皮肉であろう。

それは戦争ではなく、戦闘でもなく、殺戮であった。過去存在した魔族の中で、最も多く人間を屠ったであろうと呼ばれる悪魔、敬心の存在がある。肉体に特化した魔族や、伊礼のように精神に特化した魔族。一般の魔族兵と違い、魔王の感情より産み落とされる魔族達はその王の抱いた感情により、その在り様が変わる。彼の父、魔王庵考が生まれて始めて何を感じ、敬心という存在を産み落としたのかは今触れない。ただ敬心という魔族が極端に現象における魔術を広範囲に生み出すことに特化していたというだけの話である。繰り返すが、それは戦争ではありえなかった。軍を引き連れてアズラムへいったった敬心は、しかし単機でもってアズラム城の上空へ向かった。先に語ったように、階層の存在しない人間様式のアズラム城の上から、両の手に幾度も火球を生み出しては、それを下へと放り投げた。魔族の襲撃を予想していないこの城と町は一瞬で火の海とかした。元より戦略的拠点でありえないアズラム城に

は、防火の準備が無く、消火するべき兵の数も極端に少ない。成人男子は『全て』兵役を課せられるミルスタイン王朝の中で、兵がないということは即ち女子しかないということである。

「気分が悪いものだ……」

熱風吹き上がるアズサラム城の上空で、敬心は呟いた。逃げ惑う女子供を敬心は見下ろす。火の海から逃げた先には敬心の引き連れしてきた軍がいる。火に焼かれて死ぬか、魔族兵に裂かれて死ぬか。この場にいる人間の全ては、その二択より逃れる術を持たない。

「そういえば庵考様も、嬉々として人を殺していたことなど無かったな」

敬心の表情に色は無い。魔王庵考は産み落とされた瞬間に名由佳同様に人間より襲撃を受け、その全てを屠った。そうして庵考にとつて人間は敵となった。その庵考の子である敬心達もまた、生まれるときより人間は敵である。これだけ凄惨な殺戮を行いながら、彼ら魔族の誰一人として、人間への憎しみを持っていない。魔族とはつまりはそういうものである。王こそが全てであり、彼らには感情というものが酷く希薄なのだ。そんな彼らが再び退魔聖域内に進出した理由は、庵考の遺言に他ならない。

『人王カズラを屠れ』

それこそが庵考が今際の瞬間に、敬心たち彼の子に残した遺志だった。

「戦火や、盛りて届け王の下」

韻を踏みつつ敬心はそう口にし、アズサラム城の上空を去った。

眼下に響く女達の悲鳴は、彼の耳には届かない。

女は僅かに喉に渴きを覚え、書物を置き、蛇口のある方へと向かう。ついでに食事すませようと女は考える。万を超える書物が収められるこの地下はかなり広く、納められている棚のすぐ傍で本を読む習慣がある女は、食事の届く音には気づかない。食べたくなれば取

りにいく。

「何？」

少し騒がしく、女には感じられた。そんなことはこの場に幽閉されてから初めてのことであった。一般人の居住地とは隔離されている上、地下にあるここには、生活の音などは届かない。

「熱い」

そう感じた。だからこそ喉が渴いたのであると、女は理解する。

食事を放り込まれる穴までたどり着くと、彼女の目にしたことのない光景が広がっていた。常に暗く、深淵であった穴に、今は眩いほどの光が溢れている。それが炎であるのだと、彼女は少し考えるから把握する。熱く揺らめき輝くものと言えば炎である。見たことは無くとも、万の書物を読んだ彼女は、それを知っている。

穴から侵食を始めた炎は凄まじい勢いで燃え移り、書庫は炎に照らされる。炎という来訪者は、彼女に色々なことを教えた。

この地下書庫には、書物で言われる所の『明かり』というものが存在していなかったこと。そうであるならば、書物で言う『暗闇』という中で苦も無く生活を続けていたということ。そしてそれがやはりあまりに異常な環境であるのだということを、彼女は把握する。

「これが 明かり」

思わず燃え盛る炎の一つを手に取りめようとするが、炎を掴めるはずも無い。棚に燃え移った炎の中に、彼女は手をかざし続ける。

「そういえば焰は人を焦がすと読んだことがあるけれど、焦がすという程熱くは感じない」

しばらくの間彼女は炎の中に手をかざしていたが、少しずつではあるが、体のほうが拒否反応をおこしはじめているのを自覚する。それが炎が人を焦がすものでないわけではなく、彼女が異常であるからだとは、彼女は気付かなかった。

気がつけば焰は彼女の衣服さえ燃やしていた。

なるほど、全身が焰に包まれれば、それは多少熱いものであるの

かもしれないと、彼女はようやく炎から手を引き抜いた。

炎を消すには水。これもまた彼女が書物で得た知識だった。水を飲むために行くはずだった場所へ行き、蛇口を捻り水を出し、それを体にかける。

普段水浴びをするよりも、余程心地良く彼女には感じられた。

彼女の身体は炎によって焼けなかったが、当然のことながら書庫はどんどんと燃えていく。

「消える」

今まで彼女の全てであった書物が燃えていく。一瞬、呆然とした。それは彼女の体が燃えないかわり、彼女の未熟な心とでも言うべきものが燃えていくかのようであった。

彼女は何かに気付き、蛇口から流れ出る水を書物という書物にかけ続けた。何かに取り付かれたようにその行為を続けるが、焰が消えることはない。

最初は穴の外側にしか見えなかった焰は、今はもう書庫の半分を紅蓮に変えていた。

そしてその焰はもう一つの事実を彼女に教えていた。

人間には不可能なことがあるのだと。

焰の中心を見つめると、紅蓮の来訪者を誘った穴の周りが崩れていた。

この炎を消すことができないことを、彼女は理解した。そうであるならば、外に出なければならないと彼女は思う。彼女をここに縛る理由はなくなったのだ。

紅蓮の焰の中に悠然と身を躍らせ、彼女は生まれて始めてその穴をくぐった。

2・3 もう一つの出会い（前書き）

彼女が薄暗い階段を登りきったその先には、まだ人間がたくさんいた。彼女の全身を覆う炎は、彼女の衣服を燃やしても、その髪を焦げ付かせることできなかった。

「やはり駄目です！ 外には魔軍がおります！ 退却も不可能です」

「ならばこのまま燃え尽きろというのか！」

「うわあああん。熱いよお。熱いよお」

「熱い、熱い、あつ……」

騒ぐ子供。

騒ぐ兵。

騒ぐ女。

ここはどこだ、と彼女は思う。

これは、一体なんだ？ 自らに問いかける。

『お前は、幼い頃から全て理解していたのではないのかね？』

彼女の心の中から、声が聞こえた。

『誰に教えられるでもなく、言葉を知ったお前は、自分が異常であることを知っている』

それは知識という名の声だった。

あらゆる書物が彼女に与えた、知識という名の彼女の全てだった。

『そうでありながら、どうしてこの光景は受け入れられないのだね？』

それでようやく彼女は理解する。ここが戦場であるのだと。

そうであるならば、人々が苦しみ、こうして声を張り上げるのも当然のことだった。

『理解したか。それでは一つばかりおかしいことがないかね？』

「おかしいこと？」

自然、彼女の口から声が漏れた。

『今まで書物わたしが与えた知識の中で、君の行動に矛盾がないかね？』

「書物あなたが私に与えたものの中で、矛盾するもの？」

『君にとって王はいるかね？ その身を全て捧げてもその者の命に従うという相手が』

「いない。そんなものは生まれてこのかた見たことがない」

いやそもそも、彼女が『書物』とで出会った後に始めて見えた命ある存在が、目の前にで苦しむ人間達だ。幼い頃自分を育てたであろう女性の存在は、彼女が書を読み始める前にしか顔を会わせていない。

『ならば君は人間だ。魔族ではないのだから』

「なるほど。魔族でないのであれば、今の世界で言葉を操る存在は人間だけということにはなる」

『人間には感情がある。いかに今の世のように使い捨てられ、道具のように扱われようと、確としてそれはあるのだ』

彼女は思い出す。もう何年前に読んだかも分からない政策について記した書物の一文を。

いわく 人間というものは魔族と違い、生まれた時より栄養だけを与え続け、後は出来る限り放置すると丸つきり赤子のままのうちに育つ。過去兵を量産するために強制的に孕まされる女が同時に反発したことがあった。それに対し、上記のような方法を取ったことがある。知識的な接触を何一つ行わせず、肉体だけを成長させ、子をなせる体となったところで種付けを行うというものである。しかし不思議なことに男達が近づいた瞬間、その赤子にも似た女達は逃げ出した。言葉も話せず、服を着ることもなかったその女達は、しかし他者と初めて触れ合ったその時に、奇声を発し逃げ始めた。言葉が使えるかどうかの差だけなのではないか。結局の所、知識や知能は発達せずとも、年月と共に『感情』は育っていくのではないか。そしてそれは、当人達がその感情の『捌け口』とであった時に初めて発露するものなのではないか？

「なるほど……、そうかもしれない」

燃え盛る焰の中で、朽ちていく生命をその眼のうちに捉えながら、彼女は呟いた。

「私にもどうやら、一つ感情が芽生えたらしい」

そう彼女が自覚した瞬間、『書物』の声は聞こえなくなる。自分の内に知識という名の他者を用意せずとも、彼女には既に感情がある。

「あなたの与えてくれた知識を、この世界で確かめたい」

二十をゆうに過ぎている彼女が抱いた感情は、世界が広がった子供が抱くに等しい、当然のものであった。

牡丹は焼け落ちたアズサラムの廃墟を歩いている。墨とかしているのが木なのか人なのかも定かではない。何かを探すようにきよろきよろと歩き回る小さな牡丹の後ろを、黒い巨人である射絶が億劫そうについていく。

敬心は万の軍を率いて出陣したが、結局は敬心単機でアズサラム城は陥落した。が、敬心は暫くその場に軍を留めることとし、野営の準備を始めた。新たな魔王が騒ぎに気付いて現れはしまいか、という淡い期待をもつてのことである。

「ついてきてはみたものの、やっぱり中々ピンとこないなあ」

「おめーがさつさと庵考様の遺したものに気付くなり、或いは本当は何もありませんでした、ただのクソガキでしたって証明できれば俺もこんなかつたるいことしなくてすむんだがな」

「なんだかいつも以上に冷たいですね、射絶さん……」

人間並みの戦闘力しか持たないからか、牡丹は誰に対しても基本弱気である。が、生まれてからすぐ護衛につけられた射絶とは付き合いが長いせいか、多少は碎けて話すことが出来た。

「そりゃそうだ。久々に戦場に出るんだと思ってたら、敬心の旦那一人で全部すませちまいやがった。拍子抜けしたらねーぜ」

あれだけの殺戮を行いながら気分が悪いと評した敬心とは対照的に、射絶は戦いを好んだ。

「ここは魔族の力を極端に抑える退魔聖域の中だぜ？　化け物だなあの御仁は」

射絶自身が、ただその場にいるだけで重りでもつけられているかのような感覚を持っている。それだけで体力を消費するような類のものではなく、人間相手にそれを口で説明するのは酷く難しいものではあるが、ようするに居心地が悪く、何かをやるうにも全力が出せない場所であるのだ。

「わたしにも、何かがあるんでしょうか」

魔王が手順を踏んで産んだわけではない以上、牡丹が庵考の感情から産み落とされた魔族であることは間違いない。しかし同じ生まれ方をした敬心と、あまりにも全てが違いすぎた。

「さてな……。それを考えるのがためーの仕事だろうが。俺みたいな一般魔族には縁の無い話だよ」

対して射絶は『繭』で生まれた圧倒的多数を占める魔族の側である。本来魔王が子である魔族を生み出すには繭を作成し、彼らはそこから生まれてくる。

「それにしても庵考様が亡くなられて一年になるというのに、次代の魔王様はどこにいらっしやるんでしょうね」

ガラムレインで生まれて早々に隠遁生活を送っていることを、牡丹が知るはずもない。

「東方でも見つかつちやいないんだろう？」

「敬心様にはそう伺っていますが」

ミルスタイン本国を守る退魔聖域のあるこの一体は大陸の西方に当り、東方には広大な土地が広がっている。人と魔の戦争が始まる前は人間達が大部分を支配していたが、今はその影はない。魔族達も人間との戦争のため大半が西方に集まっており、広大な東方の地は、普段無人である。敬心は魔王が東方に生れ落ちた可能性を考え、兵の一部を捜索にあたらせてはいたが、当然ながら成果は上がって

いない。

「目立つ筈なんだがなあ。圧倒的存在感に加えて黒髪に黒の瞳」

「そうですねえ。丁度あんな感じで……」

牡丹が足を止め、一つの廃墟の上を指差す。

「そうだな。丁度あんな感じだろうな　　つてえ!？」

牡丹の指の先に視線をやった射絶が嬌声をあげる。

そこに黒髪の彼女がいた。彼女は一糸も纏わぬままに一夜をその場に立ち尽くし過ごした。それがそれまでの彼女の生涯の伴侶である書物達との別れの時間であつたのか。あるいは何をして良いのかはつきりとしなかつたのか、それは分からない。

「魔王さま!」

彼女の元へ牡丹が走る。呆けていた射絶も慌ててそれに続いた。

「魔王さま、まさかこのようなところにいらっしゃるなんて!」

牡丹は彼女の前まで止まり、喜びの声をあげる。

「　　魔王?」

彼女は一瞬考えて、すぐに理解する。

「私は魔王ではない」

何故ならば、彼女は人の腹から生まれているし、翼も角も持つてはいない。

「記憶が曖昧になられていらっしゃるのかもしれない。射絶と申します。以後お見知りおきを」

射絶は立つたまま頭を下げ、礼を示した。平伏はしない。彼らが膝を折るのは、自らの主に対してだけである。

「私は牡丹といいます!」

牡丹は緊張と照れを含んだ笑みを浮かべながら、彼女が決まってる敬礼をした。

「ともかく、我らが陣に来ては頂けませんか」

「　　なるほど、行こう」

彼女はすぐにそう答えた。目の前の存在が初めて見る魔族というもので、彼らが自分のことを魔王と誤解しているのは分かった。が、

数十年ぶりに彼女に声をかけた初めての存在。それが牡丹と射絶であつたのは、彼女にとっては真実である。言葉を交わしたのもそうだ。今までに感じたことの無い何かが、彼女の中に生まれていた。それが喜であり、嬉であり、楽であることは、彼女はまだ知らない。「では、ご案内いたします。申し訳ございませんが、これが飛べないものでして……。徒歩でもよろしいでしょうか」

顔をしかめつつ、射絶は横にいる牡丹を指す。

「これとか言わないでくださいよ」

牡丹の声には不満のそれが混じってはいるが、酷く弱い。魔族でありながら空を飛べない彼女は、今回の行軍において射絶に抱えられてついてきた。その射絶に対して強く反論できないのも当然だろう。

「かまわない。私も飛ぶことは出来ないしな」

「お戯れを……。お召し物を用意したいところですが手持ちがありません。陣につくまでお待ち下さい」

射絶は上半身に何も纏わず、その隆々たる黒い筋肉を外気に晒している。裸である彼女に対し、渡せるものは何も無い。

「かまわない。行こう」

「ご案内します」

射絶はそういう彼女に一礼し、歩き出した。その後ろを黒髪の女と牡丹がついていく。

「一つ聞くが、私に角も翼も無いのが不思議には思わないのか？」

裸足の女が墨とかした何かを踏みつけ進む。それを厭わず、また傷つかないことが、射絶には彼女が魔王であることの証に見えた。普通の人間ならばこうはいかない。

「魔族と違い、王は自らの意思で翼と角を消すことが出来るそうです。庵考様がそれをなさったことはありませんが」

射絶がそれを知っているのは、生まれた時に世界から与えられた知識であり、彼自身が目にしたものではない。

「ですから翼が無いという否定的要素よりも、黒髪であるという肯

定要素の方が大きいかと」

「私自身が違うと言っているのだが」

黒髪の彼女が誘われるままについていっているのは、単純に誰かとともにいることが新鮮であつたからだろう。孤独というものを感ずることが出来ないほどに、彼女は常に孤独であつたからだ。だから別に彼女は魔王に祭り上げられたいわけでもなく、誤解は解いておきたかつた。

「失礼ですが、記憶が混乱なされているのだと私は考えております。それに魔王という存在がどうやって世界から産み落とされるのかは、我々も知りません。何か異例なことでもあつたのかもしれませんが」

「なるほど」

射絶の言葉に彼女は頷いた。これまでの生全てを書物とすごしてきた彼女は、感情を排した理論的な考え方をする。確かに彼女は人間の腹から生まれたが黒髪である。人間の腹から生まれたものは人間であるが、黒髪を持つ者は元来魔王であるはずである。相反する事象が同時に成立している以上、それまでの常識では語れない異例ということである。そうである以上、彼女自身、自分が魔王である可能性に関しても否定しきれないことを理解した。

「それを確かめる術はあるのだろうか」

疑問が浮かべば答えを求める。項を捲れば答えを与えてくれる書物と過ごしてきた彼女は、その傾向が人一倍強いのもかもしれない。

「さて、私には思いつきませんが」

「そうか……」

それきり彼女は口を閉ざした。射絶もまた話しかけなかつた。

三人はただ陣までの道を歩いていく。空を飛ぶわけでも、駆けるわけでもないから少しばかり時間がかかりそうだった。

「お名前は何とおっしゃるのですか？」

暫くして、牡丹が彼女に問いかけた。

「名前」

彼女は呟き、考える。名前というものは他者と区別するために与えられる。彼女には長年必要が無かったものである。

「名前は無い。与えられていない」

それは彼女からすれば父であるカズラから与えられなかったという意味だが、牡丹と射絶には別の意味に聞こえる。魔族は生まれながらに名がある。言い方を変えれば、世界が名を与えるに等しく、生まれた時には自らの名を知っている。

「やはりご記憶が曖昧なのではございませんか」

「意識ははっきりしているつもりだが、まあいいか」

射絶に説明しても理解は得られないだろうと、彼女は思った。どうも射絶は彼女を魔王だと信じ込んでいるのだと彼女にも分かった。

「お名前が無いと不便ですよねえ。何とお呼びすればいいですか？」

問いかける牡丹を見て、彼女は名前のことではなく、よく笑うものだと別のことが頭に浮かんだ。魔族とは感情が希薄であり、固体によつては無いと言い切れるとまで書物にはあったが、目の前の牡丹を見る限りとてもそうは思えなかった。

「好きに呼ぶといい」

楽しければ笑う。嬉しければ笑う。喜べば笑う。そういうものであることを彼女は知っている。ただ、それがどういう感情であるのか、まだ知らない。それでも

「いや」

孤独を感じることにすら出来なかった彼女にとって、会話というものが心躍らないものであるはずもなかった。

「無いと不便であろうし、考えてはおこう」

それはすなわち、これから牡丹達と付き合いたいという、彼女の意思の裏返し。

「はい！」

満面の笑みを浮かべる牡丹を見て、彼女もまた薄く微笑んだ。自分の口元が歪んでいるのに彼女は気づく。そうしてようやく、自分が今感じているものこそが、嬉しく、楽しいというものなのだと理

解した。

2・3 もう一つの出会い

彼女が薄暗い階段を登りきったその先には、まだ人間がたくさんいた。彼女の全身を覆う炎は、彼女の衣服を燃やしても、その髪を焦げ付かせることできなかった。

「やはり駄目です！ 外には魔軍がおります！ 退却も不可能です」

「ならばこのまま燃え尽きろというのか！」

「うわあああん。熱いよお。熱いよお」

「熱い、熱い、あつ……」

騒ぐ子供。

騒ぐ兵。

騒ぐ女。

ここはどこだ、と彼女は思う。

これは、一体なんだ？ 自らに問いかける。

『お前は、幼い頃から全て理解していたのではないのかね？』

彼女の心の中から、声が聞こえた。

『誰に教えられるでもなく、言葉を知ったお前は、自分が異常であることを知っている』

それは知識という名の声だった。

あらゆる書物が彼女に与えた、知識という名の彼女の全てだった。

『そうでありながら、どうしてこの光景は受け入れられないのだね？』

それでようやく彼女は理解する。ここが戦場であるのだと。

そうであるならば、人々が苦しみ、こうして声を張り上げるのも当然のことだった。

『理解したか。それでは一つばかりおかしいことがないかね？』

「おかしいこと？」

自然、彼女の口から声が漏れた。

『今まで書物わたしが与えた知識の中で、君の行動に矛盾がないかね？』

「書物あなたが私に与えたものの中で、矛盾するもの？」

『君にとって王はいるかね？ その身を全て捧げてもその者の命に従うという相手が』

「いない。そんなものは生まれてこのかた見たことがない」

いやそもそも、彼女が『書物』とで出会った後に始めて見えた命ある存在が、目の前にで苦しむ人間達だ。幼い頃自分を育てたであろう女性の存在は、彼女が書を読み始める前にしか顔を会わせていない。

『ならば君は人間だ。魔族ではないのだから』

「なるほど。魔族でないのであれば、今の世界で言葉を操る存在は人間だけということにはなる」

『人間には感情がある。いかに今の世のように使い捨てられ、道具のように扱われようと、確としてそれはあるのだ』

彼女は思い出す。もう何年前に読んだかも分からない政策について記した書物の一文を。

いわく 人間というものは魔族と違い、生まれた時より栄養だけを与え続け、後は出来る限り放置すると丸つきり赤子のままのよう
に育つ。過去兵を量産するために強制的に孕まされる女が同時に
反発したことがあった。それに対し、上記のような方法を取ったこ
とがある。知識的な接触を何一つ行わせず、肉体だけを成長させ、
子をなせる体となったところで種付けを行うというものである。し
かし不思議なことに男達が近づいた瞬間、その赤子にも似た女達は
逃げ出した。言葉も話せず、服を着ることもなかったその女達は、
しかし他者と初めて触れ合ったその時に、奇声を発し逃げ始めた。
言葉が使えるかどうかの差だけなのではないか。結局の所、知識や
知能は発達せずとも、年月と共に『感情』は育っていくのではない
か。そしてそれは、当人達がその感情の『捌け口』とであった時に
初めて発露するものなのではないか？

「なるほど……、そうかもしれない」

燃え盛る焰の中で、朽ちていく生命をその眼のうちに捉えながら、彼女は呟いた。

「私にもどうやら、一つ感情が芽生えたらしい」

そう彼女が自覚した瞬間、『書物』の声は聞こえなくなる。自分の内に知識という名の他者を用意せずとも、彼女には既に感情がある。

「あなたの与えてくれた知識を、この世界で確かめたい」

二十をゆうに過ぎている彼女が抱いた感情は、世界が広がった子供が抱くに等しい、当然のものであった。

牡丹は焼け落ちたアズサラムの廃墟を歩いている。墨とかしているのが木なのか人なのかも定かではない。何かを探すようにきよろきよろと歩き回る小さな牡丹の後ろを、黒い巨人である射絶が億劫そうについていく。

敬心は万の軍を率いて出陣したが、結局は敬心単機でアズサラム城は陥落した。が、敬心は暫くその場に軍を留めることとし、野営の準備を始めた。新たな魔王が騒ぎに気付いて現れはしまいか、という淡い期待をもったのである。

「ついてきてはみたものの、やっぱり中々ピンとこないなあ」

「おめーがさっさと庵考様の遺したものに気付くなり、或いは本当は何もありませんでした、ただのクソガキでしたって証明できれば俺もこんなかったるいことなくてすむんだがな」

「なんだかいつも以上に冷たいですね、射絶さん……」

人間並みの戦闘力しか持たないからか、牡丹は誰に対しても基本弱気である。が、生まれてからすぐ護衛につけられた射絶とは付き合いが長いせいか、多少は碎けて話すことが出来た。

「そりゃそうだ。久々に戦場に出るんだと思ってたら、敬心の旦那一人で全部すませちまいやがった。拍子抜けったらねーぜ」

あれだけの殺戮を行いながら気分が悪いと評した敬心とは対照的に、射絶は戦いを好んだ。

「ここは魔族の力を極端に抑える退魔聖域の中だぜ？　化け物だなあの御仁は」

射絶自身が、ただその場にいるだけで重りでもつけられているかのような感覚を持っている。それだけで体力を消費するような類のものではなく、人間相手にそれを口で説明するのは酷く難しいものではあるが、ようするに居心地が悪く、何かをやるうにも全力が出せない場所であるのだ。

「わたしにも、何かがあるんでしょうか」

魔王が手順を踏んで産んだわけではない以上、牡丹が庵考の感情から産み落とされた魔族であることは間違いない。しかし同じ生まれ方をした敬心と、あまりにも全てが違いすぎた。

「さてな……。それを考えるのがためーの仕事だろうが。俺みたいな一般魔族には縁の無い話だよ」

対して射絶は『繭』で生まれた圧倒的多数を占める魔族の側である。本来魔王が子である魔族を生み出すには繭を作成し、彼らはそこから生まれてくる。

「それにしても庵考様が亡くなられて一年になるというのに、次代の魔王様はどこにいらっしやるんでしょうね」

ガラムレインで生まれて早々に隠遁生活を送っていることを、牡丹が知るはずもない。

「東方でも見つかつちやいないんだろう？」

「敬心様にはそう伺っていますが」

ミルスタイン本国を守る退魔聖域のあるこの一体は大陸の西方に当り、東方には広大な土地が広がっている。人と魔の戦争が始まる前は人間達が大部分を支配していたが、今はその影はない。魔族達も人間との戦争のため大半が西方に集まっており、広大な東方の地は、普段無人である。敬心は魔王が東方に生れ落ちた可能性を考え、兵の一部を捜索にあたらせてはいたが、当然ながら成果は上がって

いない。

「目立つ筈なんだがなあ。圧倒的存在感に加えて黒髪に黒の瞳」

「そうですねえ。丁度あんな感じで……」

牡丹が足を止め、一つの廃墟の上を指差す。

「そうだな。丁度あんな感じだろうな　　つてえ!？」

牡丹の指の先に視線をやった射絶が嬌声をあげる。

そこに黒髪の彼女がいた。彼女は一糸も纏わぬままに一夜をその場に立ち尽くし過ごした。それがそれまでの彼女の生涯の伴侶である書物達との別れの時間であつたのか。あるいは何をして良いのかはつきりとしなかつたのか、それは分からない。

「魔王さま!」

彼女の元へ牡丹が走る。呆けていた射絶も慌ててそれに続いた。

「魔王さま、まさかこのようなところにいらっしゃるなんて!」

牡丹は彼女の前まで止まり、喜びの声をあげる。

「　　魔王?」

彼女は一瞬考えて、すぐに理解する。

「私は魔王ではない」

何故ならば、彼女は人の腹から生まれているし、翼も角も持つてはいない。

「記憶が曖昧になられていらっしゃるのかもしれない。射絶と申します。以後お見知りおきを」

射絶は立つたまま頭を下げ、礼を示した。平伏はしない。彼らが膝を折るのは、自らの主に対してだけである。

「私は牡丹といいます!」

牡丹は緊張と照れを含んだ笑みを浮かべながら、彼女が決まってる敬礼をした。

「ともかく、我らが陣に来ては頂けませんか」

「　　なるほど、行こう」

彼女はすぐにそう答えた。目の前の存在が初めて見る魔族というもので、彼らが自分のことを魔王と誤解しているのは分かった。が、

数十年ぶりに彼女に声をかけた初めての存在。それが牡丹と射絶であつたのは、彼女にとっては真実である。言葉を交わしたのもそうだ。今までに感じたことの無い何かが、彼女の中に生まれていた。それが喜であり、嬉であり、楽であることは、彼女はまだ知らない。「では、ご案内いたします。申し訳ございませんが、これが飛べないものでして……。徒歩でもよろしいでしょうか」

顔をしかめつつ、射絶は横にいる牡丹を指す。

「これとか言わないでくださいよ」

牡丹の声には不満のそれが混じってはいるが、酷く弱い。魔族でありながら空を飛べない彼女は、今回の行軍において射絶に抱えられてついてきた。その射絶に対して強く反論できないのも当然だろう。

「かまわない。私も飛ぶことは出来ないしな」

「お戯れを……。お召し物を用意したいところですが手持ちがありません。陣につくまでお待ち下さい」

射絶は上半身に何も纏わず、その隆々たる黒い筋肉を外気に晒している。裸である彼女に対し、渡せるものは何も無い。

「かまわない。行こう」

「ご案内します」

射絶はそういう彼女に一礼し、歩き出した。その後ろを黒髪の女と牡丹がついていく。

「一つ聞くが、私に角も翼も無いのが不思議には思わないのか？」

裸足の女が墨とかした何かを踏みつけ進む。それを厭わず、また傷つかないことが、射絶には彼女が魔王であることの証に見えた。普通の人間ならばこうはいかない。

「魔族と違い、王は自らの意思で翼と角を消すことが出来るそうです。庵考様がそれをなさったことはありませんが」

射絶がそれを知っているのは、生まれた時に世界から与えられた知識であり、彼自身が目にしたものではない。

「ですから翼が無いという否定的要素よりも、黒髪であるという肯

定要素の方が大きいかと」

「私自身が違うと言っているのだが」

黒髪の彼女が誘われるままについているのは、単純に誰かとともにいることが新鮮であったからだろう。孤独というものを感ずることが出来ないほどに、彼女は常に孤独であったからだ。だから別に彼女は魔王に祭り上げられたいわけでもなく、誤解は解いておきたかった。

「失礼ですが、記憶が混乱なされているのだと私は考えております。それに魔王という存在がどうやって世界から産み落とされるのかは、我々も知りません。何か異例なことでもあったのかもしれませんがな」

「なるほど」

射絶の言葉に彼女は頷いた。これまでの生全てを書物とすごしてきた彼女は、感情を排した理論的な考え方をする。確かに彼女は人間の腹から生まれたが黒髪である。人間の腹から生まれたものは人間であるが、黒髪を持つ者は元来魔王であるはずである。相反する事象が同時に成立している以上、それまでの常識では語れない異例ということである。そうである以上、彼女自身、自分が魔王である可能性に関しても否定しきれないことを理解した。

「それを確かめる術はあるのだろうか」

疑問が浮かべば答えを求める。項を捲れば答えを与えてくれる書物と過ごしてきた彼女は、その傾向が人一倍強いのもかもしれない。

「さて、私には思いつきませんが」

「そうか……」

それきり彼女は口を閉ざした。射絶もまた話しかけなかった。

三人はただ陣までの道を歩いていく。空を飛ぶわけでも、駆けるわけでもないから少しばかり時間がかかりそうだった。

「お名前は何とおっしゃるのですか？」

暫くして、牡丹が彼女に問いかけた。

「名前」

彼女は呟き、考える。名前というものは他者と区別するために与えられる。彼女には長年必要が無かったものである。

「名前は無い。与えられていない」

それは彼女からすれば父であるカズラから与えられなかったという意味だが、牡丹と射絶には別の意味に聞こえる。魔族は生まれながらに名がある。言い方を変えれば、世界が名を与えるに等しく、生まれた時には自らの名を知っている。

「やはりご記憶が曖昧なのではございませんか」

「意識ははっきりしているつもりだが、まあいいか」

射絶に説明しても理解は得られないだろうと、彼女は思った。どうも射絶は彼女を魔王だと信じ込んでいるのだと彼女にも分かった。「お名前が無いと不便ですよねえ。何とお呼びすればいいですか？」

問いかける牡丹を見て、彼女は名前のことではなく、よく笑うものだと別のことが頭に浮かんだ。魔族とは感情が希薄であり、固体によつては無いと言い切れるとまで書物にはあったが、目の前の牡丹を見る限りとてもそうは思えなかった。

「好きに呼ぶといい」

楽しければ笑う。嬉しければ笑う。喜べば笑う。そういうものであることを彼女は知っている。ただ、それがどういう感情であるのか、まだ知らない。それでも

「いや」

孤独を感じることにすら出来なかった彼女にとって、会話というものが心躍らないものであるはずもなかった。

「無いと不便であろうし、考えてはおこう」

それはすなわち、これから牡丹達と付き合いたいという、彼女の意思の裏返し。

「はい！」

満面の笑みを浮かべる牡丹を見て、彼女もまた薄く微笑んだ。自分の口元が歪んでいるのに彼女は気づく。そうしてようやく、自分が今感じているものこそが、嬉しく、楽しいというものなのだと理

解
し
た。
。

2 - 4 魔族と黒髪

敬心のいる本陣に戻った射絶は、まず黒髪の彼女に服を与えた。陣にある女性用の衣服は一通り用意させたが、彼女は身体をすっぽりと覆う黒いローブを選び、腰を布で結んだだけで装飾品の類は一切取らなかった。

「庵考様も、あまり着飾られる方ではありませんでした」

射絶は敬心のいるテントに向かう間、そんなことを言った。

彼女が着替えている間に、兵を使い、魔王と思しき者を発見したとの報告を敬心にさせていた。

「お連れした」

射絶はテントの中にその声をかける。後ろにはやはり黒髪の彼女と牡丹が並んでいる。

「ご案内しろ」

中から敬心の声がして、射絶はテントの入り口の布を持ち、開いた。

「どうぞ」

布を掴んだまま、射絶は彼女を中へ誘う。彼女は無言のままそれに従い、中へと入った。射絶と牡丹は入らずに二人を見送って入り口を閉める。

「わざわざご足労頂き、失礼した」

テントの中は、三十人は入りそうな広さがある。出征先では軍議の場を兼ねる敬心のテントは、他の者達のそれよりも大きい。敬心はテントの中に用意された椅子を彼女に勧め、彼女はそれに従った。「話を伺わせて頂いてよろしいか？」

敬心は目の前の黒髪の女性が自分を魔王ではないと言っていることを聞いていた。まずは確認が先決である。

「先にこちらから確認したい」

彼女はここが交渉と駆け引きの場だと察することが出来た。経験

を何ら持たない彼女がそれを知ることが出来たのは、交渉の場が書の中に頻繁に登場したからだろう。

「魔族は人を屠るが正義であり、定めであると聞いている。私が魔王でないと分かれば殺されざるを得ないなら、私は口を紡ぐ。そのところはどうか」

死にたくないと、今彼女は思っている。世界には書物では得られないものが豊富にあるのだということを、僅かの時間から彼女は感じ、今彼女が生きる意味はそこにこそある。

敬心は出鼻をくじかれながら笑った。敬心からすれば今は確認の場であり、交渉のそれではない。それを一言で変えてしまった彼女が面白かった。

「逆に尋ねるが、私の口から放たれる言葉が真実であるとは限らない。それでも貴女はそれを聞くのか」

つい敬心も彼女に乗った。その時点で、敬心は一步彼女に遅れを取るが、それさえ敬心は楽しめるようだった。

「真実であるとは限らずとも、予測はつこう。納得が出来なければ従わぬし、納得が出来ればそれでこの身が朽ちようと構わない」

「なるほど、面白い御仁だ」

敬心は誰よりも魔王に近い魔族だった。庵考も言葉遊びを好み、よくそれに付き合った。どこか敬心は懐かしさを覚えていた。

「では再び逆に問わせて頂こう。我々からしてもあなたの言葉からあなたが次代の魔王であるかどうかを計らざるを得ない。あなたの出生に関して知るものがないのだからな。そうである以上、あなたの言葉からあなたが魔王でないと判断をしても、あなたの言葉が真実であるかどうかをこちらが知りえない以上、やはりあなたが魔王である可能性も残る。確かに魔族にとって人は敵だが、一年の間我々が待ち続けた次代の魔王かもしれない存在を、無闇に害したりするだろうか」

「何故笑うのだ？」

敬心は自覚していなかったが、その口元に刻まれた笑みは大きく

なっていた。

「失礼した。気分を害されたのなら謝罪しよう」

「いや、それには及ばない。よもや貴公は今楽しいのかと、そう思っただけだ」

口元から笑みを消した敬心に、今度は彼女が微笑んだ。

「少なくとも、私は面白い。生まれてから穴倉に籠っていたのでね」
「そうか。正直に言えば、私もまた楽しかった」

言葉で相手の腹を探る、などということは二百年を超える敬心の生の中でも始めてのことであつた。親である魔王と弟、妹である魔族に対して腹を探るようなことをする必要があるわけもなく、相手が人間であれば刃を交えるだけだったからだ。

「良く分かった。何でも聞いてくれ」

再び笑みを浮かべた敬心を見て、彼女はそう答えた。酷く理屈的であるべき交渉の場は、酷く感情的な理由で閉幕した。つい先日まで誰とも見えることがなかった彼女からすれば、誰かと話すこと自体が酷く楽しいものであるに違いなかった。

敬心もまた、微笑む彼女に一つ頷き返し、質問を始める。

「生まれはいつになられるか」

「分からない。時間という感覚を持ったことがないからだ。私は生まれてすぐアズラム城の地下に放り込まれたようだ。先日の騒動で外に出たのが初めてだ」

先に敬心自身が言つたように、その真偽は敬心には分からない。

「人の腹から生まれたのか？」

「分からん」

言い切る彼女に、敬心は苦笑する。人間は魔族と違い、自分自身がどこから生まれたかを記憶していようはずもない。ただ他者から聞くか常識という代物から、自分が人間の腹から出てきたのだと後に知るだけだ。

「質問を変えよう。生まれてから何度眠った？」

「ふむ……」

そこで初めて彼女は言葉を切り、考えた。幾度眠ったかなど普通人は覚えてはいないだろうが、なんとなく敬心の言いたいことが分かった。彼女も人間は一日に一度睡眠を取るものだということがうまい知っている。

「万に届くかは分からないが、千はくだるまい」

睡眠を取った数は覚えていないが、読んだ書物のことは全て覚えていた。万を越える書物を読んだ彼女は、大体数冊読み終わると一度眠りについた。そこから逆算しただけである。

「なるほど。どうやら魔王殿ではないらしいな」

敬心はあっさりとそう言った。彼女が嘘を言っているようには見えなかった。庵考が死んでからまだ一年強。魔王も魔族も睡眠は必要とするし、少なくとも彼女がこの一年に生まれたわけでもないらしい。

もとより射絶に魔王らしき者が見つかったと報告を受けた段階で、敬心は魔王である可能性は薄いと考えていた。人間が魔王の捕獲に成功し幽閉したのだとすれば、アズサラムの防備があれ程薄いはずがない。相当厳重な警備を行うはずなのだ。

「しかし黒髪の人間などが生まれるとは、奇異なこともあったものだ」

敬心は腕を組み、姿勢を崩した。それこそが目の前の彼女を魔王と考えていない証明でもある。

「これからどうする？ 命を取ろうとは思わんが」

魔王である可能性がゼロではないという理由よりも、敬心にとって初めて会話をした人間である。不思議と親近感が沸いた。「いくつか確認したいことがある」

「答えられることであれば答えよう」

敬心の言う答えられる、というのは駆け引きの話ではない。知らないことは答えられないだけで、知っていることは全て話すつもりでいた。敬心からすれば隠す必要のあることなどなかった。

「先ほど一年の間、魔王を待ち続けたと言っていたな。魔王庵考は

崩御し、貴公らはその子だと考えて良いのか？」

彼女の読んだ書物に、既に庵考の名はあった。射絶が自分を魔王と呼んだ時から、庵考が死んだことにある程度予測はついていたが、確認する。

「その通りだ」

「一つ確認するが、無礼なことを聞くかもしれん。よいか？」

「私も魔王ではないお前に礼を尽くす必要はあるまいな。砕けさせてもらおう。そちらも構わん。庵考様が亡くなられたことを崩御と表現したお前は、最低限の礼儀は持っていよう」

通常の人間であれば、当然魔王を死んだと表現するだろう。

「庵考王はどうして亡くなられた？ 寿命だろうか？」

彼女は世界から知識を与えられて生まれてくる魔族とは違い、今の世の情勢に関してはまるで知識がない。

「討ち死になされた」

敬心の表情から色が消える。それは守れなかった自分を責めるものであり、尋ねた彼女に対してではない。

「で、貴公らはこれよりどうする」

「庵考様の遺命に従い、次代の魔王を待ったが、一年待っても現れぬ。アズサラムを攻めたのは次代の魔王殿が気づけばと思つてのことだが、現れぬ者を待ち続けても仕方あるまい。このままミルスタインに侵攻するつもりだ」

ミルスタインを滅ぼさない限り、魔族に平和は訪れない。それが庵考の口癖だった。

「勝算は酷く薄かるう。それでも行くか」

過去、歴代の魔王が魔族を従えて侵攻してなお、ミルスタイン王朝は陥落させられなかった。魔王を失った子の魔族達だけでそれをして、とても目的は果たせないだろうと彼女は思う。

「お前は魔族を知らん。知識として持つてはいてもな」

敬心は彼女に怒ることもなく、極めて普段通りに言う。

「魔族にとって、王の言葉とは約束された未来である。ミルスタイン」

ン王朝を滅ぼすことを王が望まれたのであるならば、我々はそれを実現させることだけを考えればよい。魔族とは、自ら思考をしないものだ」

実際には魔族にも思考も感情も存在する。しかしそれは全て彼らの王のためであって、人間のそれとは種類が違う。

「面白い」

彼女は笑った。敬心は無礼であるとは思わず、その笑みを不思議に思った。

「何がだ？」

「貴公は頭が切れるように見える。実際に王を欠いた状態でミルスタインを滅ぼせると夢想するほど愚かであるはずがない。にもかかわらず、先ほどの言葉は強がりでも幻想でもなく、確として貴公が信じて言っているのが分かった。だから魔族とは面白いものだと思っただ」

敬心という固体の思考からすれば、彼女の言うようにミルスタインを滅ぼすのは当然不可能である。しかし敬心にはその事実が分かっているのに感じない。王である庵考が滅ぼせと言った以上は、敬心にはミルスタイン王朝が滅ぶ姿しか浮かばないのである。完全なる矛盾がそこにあり、しかし敬心自身がその矛盾に気づいていながら感じない。狂信した人間に似ているようであって、正常な思考力が存在する辺り別物である。彼女からすれば確かに興味深いと言えた。

「決めた。私も同行させてもらおう」

「いつ人間に情報を漏らすか分からない存在を同行させるのは危険だな」

今まで敬心の話した内容は、既にミルスタインには入っているはずの情報ばかりだ。アズサラムに侵攻した以上、彼らは防備を固めるだろう。しかし次にどこへ侵攻するかを具体的に漏らされては不利益になる。

「そもそもお前が同行してどうするつもりだ」

敬心には何故彼女が同行する気になったのか、検討がつかない。
「私は生まれてよりほぼ全ての時を、書物と対することで過ごしてきた」

彼女の言葉は質問の回答とはかけ離れているように敬心は感じたが、実際はそうではない。

「現在の世にある書物で、最も多いのはなんだと思う?」
それは即ち、今がどういう世であるかを尋ねている。

「戦争、戦術、戦略。戦乱の世が千年と続くこの世は、戦うための書物で溢れている」

即ちそれは、彼女が人生の中で最も多く触れてきた内容が、戦争というものであるということ。

「それを使う場合は、ここ以外にはありえまい」
彼女は自分が黒髪であつたから、人間に幽閉されたのだと考えて

いる。そうである以上、自分が人間の中へ混じっても恐らく迫害されるであろう。それでは彼女は軍を動かせない。

「私を軍師として使え、敬心殿」
決意を持って言い放った彼女に対し、敬心は困惑の感情が強い。

「そう言われて、すぐに信じられるほど私はお人よしではない。お前の言葉も、能力もだ」

敬心の回答は至極当然のものである。
「能力はおいおい認めさせるしかあるまいが、私が裏切らぬように

するのは簡単だろう」

彼女の浮かべた笑みは危険を好む子供のそれに似ていた。

「誓約させればよからう。魔術でもって」
「随分と詳しいものだ……」

敬心は嘆息した。彼女の言葉を信じきつたわけではないが、彼女が通常の人間にあらざる知識を持っているのは今の一言で理解した。誓約の魔術などというものは、太古の昔に書物から言葉を消した。使う機会がないからだが、今は触れない。

「本当に良いのか?」

今一度敬心は念を押す。確かに誓約させれば彼女が裏切ることは無くなる。しかし違えば彼女は死ぬことになる。

「構わぬよ」

「何故そこまでする。お前が軍を動かしたいのだという気持ちは分かったが、話を聞く限り外に出たばかりのお前がいきなり命を賭けるほどのものか？」

即答する彼女に、敬心は問いかける。

「理由は、もう一つある」

「何だ？」

微笑む彼女の真意は、敬心には分からない。

「あなたが私を外に出してくれたからだ。あなたと言葉を交わすのは楽しく、心が踊る。単純に私は、そんなあなたの傍にいたいだけなのかもしれないな」

そう言つて微笑む彼女に、敬心は答えられなかった。彼自身、人間から好意などというものをぶつけられるのは初めてのことである。

「分かった。はじめよう」

敬心の右手が淡く光った。彼女に敬心が制約を与え、彼女が誓約するのである。

「制約とともに、名を与えよう。名はないのだろうか？」

「無いな。楽しみだ。本当に楽しみだ。名前というのは他者がいるからこそ必要なものなのだから」

破れば死する制約を前にして、彼女は幼子のように笑う。

「終、ついだ。見事我らが、否。お前の言う戦乱の世を終わらせてみよ、軍師よ」

「なるほど。終わると書いてつか。気に入った」

漢字とは魔族が名に用いるもので、人間は英字を用いることを彼女は知っていた。その漢字の名が、酷く今の彼女には嬉しかった。

「しかし無粋だな、敬心殿。いや、軍師と呼ばれたのだ。敬心様とお呼びしましょう」

終は無粋といいつつも声を抑えて笑う。

「何がだ？」

「折角名を頂いたのです。役職ではなく名で呼んで欲しいのです」
敬語を用いるようにした終が、区切りをつけたいのだと言っているのは敬心にも理解できた。

「なるほど……」

制約の言葉を口にする前に、敬心はその名を口にする。

「終」

その時の、自らを現す名と呼ばれた時の彼女の喜びを、生涯敬心が知ることは無い。それだけで命を賭けうる喜びを。

「始めるぞ」

嗚咽が漏れぬよう、終は首だけで頷いた。彼女の生まれて初めて流した涙だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3235o/>

三国記

2010年10月18日00時55分発行